

古代集落の展開

——越後¹⁾を事例として——

春日 真実

はじめに

小稿は集落遺跡の分析を通じ、古代社会の一端を明らかにすることを目的とするものである。筆者は前稿で9世紀後半から10世紀の集落について若干の検討を行ったが〔春日1993〕、前後の時期との差異についてはほとんど述べるができなかった。以下では、新潟県内において発掘調査が行われた6～13世紀の集落遺跡のうちいくつかの事例を取り上げ、検討をおこない、古代集落の変遷過程を明らかにしたい。

1 研究 史

越後における古代集落遺跡を検討するに当たって、同一テーマを扱った論考について簡単にふれる。越後を事例とした古代集落遺跡の研究としては遠藤孝司氏・川村浩司氏・坂井秀弥氏の研究をあげうる²⁾。

遠藤氏は奈良・平安時代の掘立柱建物を主体とする集落遺跡をとりあげ、掘立柱建物の主軸方位・規模について検討を行った。そして、今池遺跡・栗原遺跡などの大型の掘立柱建物が一定量存在し、主軸方位にまとまりの見られる官衙関連遺跡のほかにも、金屋遺跡・岩野下遺跡にみるような建物の規模が小型で主軸方位にもばらつきがみられる遺跡の存在することを指摘している〔遠藤1987〕。

川村浩司氏は新潟県における古代集落遺跡を集成し、掘立柱建物と竪穴住居の量比・建物の規模・出土遺物などの検討から集落遺跡を6類型に分類し、それぞれの類型の存続期間の検討と性格づけを行っている。そして①7世紀末前後、②9世紀中葉ごろ、③11世紀中葉頃にそれぞれ大きな画期があるとし、「①が官・民ともに遺跡が大規模に開始される段階、②が低地・丘陵への開発の段階」、「③が新たな集落立地の変化、あるいは遺跡の統廃合を考えた」〔川村浩司1989〕。川村氏の論考は、越後の古代集落遺跡全般をあつかった最初のものであり、集成作業として大きな意味を持つ。本稿が成るにあたっても氏の集成作業によるところが多かった。また古代集落遺跡分析の留意点・着眼点などについても学ぶべき点が多い。ただし、氏の集落遺跡の分類はやや恣意的な印象をうけ、その結果指摘した3つの画期が不鮮明なものとなった。〔川村1989〕

一方、坂井秀弥氏は、律令（体制）と王朝国家（体制）をキーワードに集落論を展開した。坂井氏によれば、越後においては7世紀末から8世紀初頭にかけて北蒲原郡聖籠町山三賀Ⅱ遺跡・西頸城郡青海町須沢角地にみるような竪穴住居を主体とする大規模な集落が成立するが、これらの集落の大半は10世紀までには廃絶し、9世紀中葉以降には上越市一之口遺跡・小丸山遺跡のような数棟の掘立柱建物・井戸・土坑・畑地がセットとなった建物小群がいくつか併存する集落に変化することを明らかにした。そして前者を律令（型）村落、後者を王朝国家（型）村落と名づけている〔坂井1989〕。

また前述したように、筆者も以前上越市一之口遺跡・新潟市小丸山遺跡を事例とし、9世紀後半から10世紀の頸城地方と蒲原地方の集落構造・土器様相・水田開発について比較・検討を行った〔春日1993〕。

以上のように、新潟県では古代集落に関する研究事例は必ずしも多くないが、優れたものが多い。特に

坂井氏の律令（体制）と王朝国家（体制）をキーワードとした方向は以後の北陸地方における奈良・平安時代研究に多くの影響を与えており、今後も基本的には継承されるべきものとする。

ただし、越後において7世紀に遡り古代集落から中世集落にいたるプロセスについて検討したものや、古代集落と中世集落との差異について述べたものはあまりない。以下ではこのような研究の状況をふまえ、集落遺跡の検討を行ないたい。

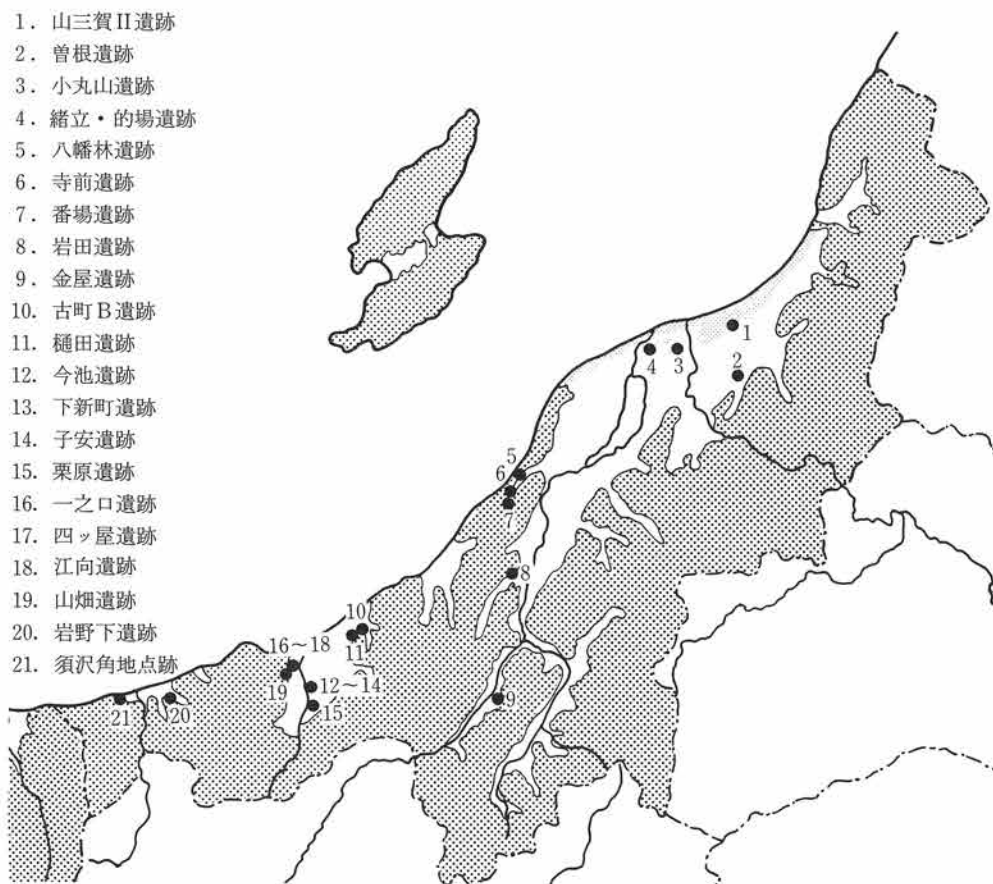
2 検討の方法

集落遺跡の実際の検討にはいるまえに、分析方法・本稿で使用する用語について若干説明を行う。

集落遺跡の分析の際に問題となることの一つは、発掘調査によって検出された掘立柱建物・井戸などの遺構群は全てが同時存在したわけではなく一定期間の累積の結果であり、同時存在した遺構を抽出する作業が必要となることである。以下の分析では竪穴住居および土坑・井戸については出土土器をもとに時期を決定した。また掘立柱建物については、建物の主軸方位に注目し、方位が一致もしくは直交し、かつ重複しないものについては同一時期と考え、年代については、柱掘方・建物の雨落ち溝・掘立柱建物に隣接する土坑からの出土土器により決定した。

用語については、1～数棟の建物の集まりについては「建物小群」、「建物小群」が複数集まって構成されたものも含め、10棟前後の建物の集まりについては「建物群」と呼ぶ。

年代の表記は西暦を用い、1世紀を四分割し、第1四半期・第2四半期・第3四半期・第4四半期とほぼ同じ意味で初頭・前半・後半・末、各世紀の50年を前後する時期については中葉と表現し、7世紀初頭のように表わす。なお、土器の年代については「今池遺跡」〔坂井1984〕、「山三賀II遺跡」〔坂井1989〕、「越



第1図 主要遺跡位置図

後平安期土器編年素描」〔坂井1989〕、「佐渡の須恵器」〔坂井・鶴間・春日1991〕、「一之口遺跡（東地区）」〔春日1993、鈴木1993〕の各編年案をもとに決定した³⁾。

3 事例の検討

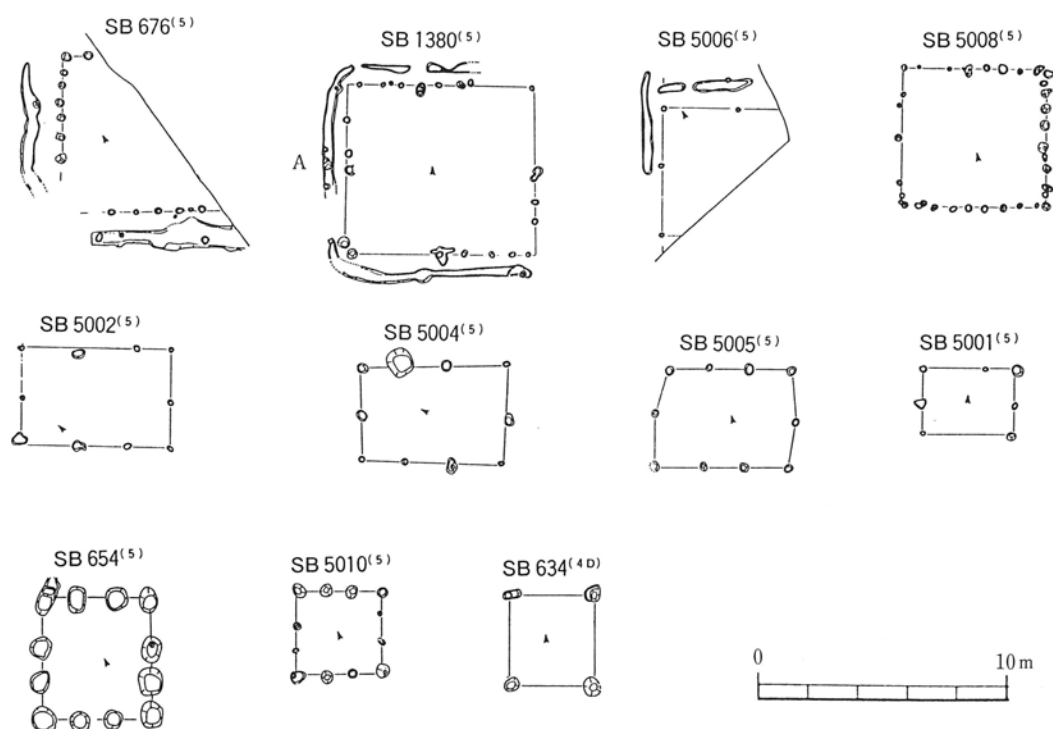
越後において集落構造がある程度明らかとなった6～13世紀の遺跡としては第1図に示した23遺跡をあげうる。以下ではそれぞれの遺跡について、同時存在した遺構の抽出を行ない、遺構の構成・建物の規模・存続期間などについて検討する。

一之口遺跡〔新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団1994〕

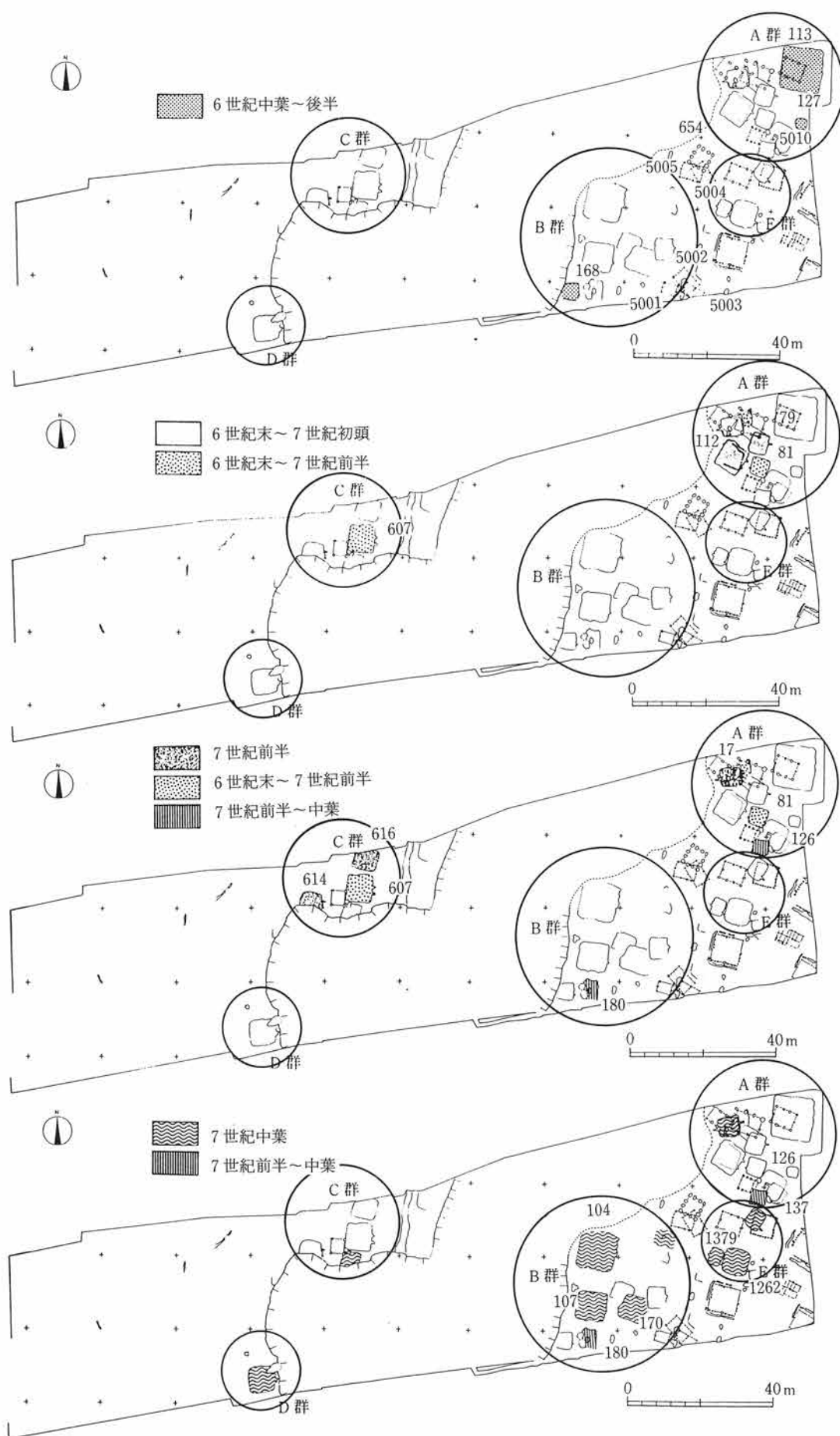
新潟県の南西部に広がる頸城平野の西側、関川右岸の自然堤防防上、上越市大字中屋敷・寺分・木田に所在する。古墳時代前期から奈良・平安時代にかけて断続的に営まれた複合遺跡であり、古墳時代前期・6～7世紀・8～11世紀の3枚の遺物包含層・遺構検出面が存在する。ここでは6～7世紀を取り上げる。遺跡は古墳時代前期の集落が廃絶した後、約100～150年の空白期間において6世紀中葉に成立し7世紀中葉まで存続する。竪穴住居を主体とする集落であるが、掘立柱建物も検出された⁴⁾。井戸は確認できない。

掘立柱建物は調査区西側を中心に分布する。平面積は30m²前後のものが多く、一般的な竪穴住居の平面積とあまり変わらない。掘立柱建物の方向には2種あり、複数の時期にまたがって存在した可能性が高いが、掘立柱建物の柱穴からは良好な出土遺物が無く年代を決めがたい。一方、竪穴住居については、鈴木俊成氏が、報告の中でその変遷を明らかにしている〔鈴木1993〕。以下では鈴木氏の示した変遷をもとに、竪穴住居の動向を中心にみていきたい。

6世紀中葉から6世紀後半、6世紀末から7世紀初頭にかけては2～3の建物小群が確認できる。調査区の中央部は河川の旧流路により破壊されており、また集落が調査区外にのびる可能性もあるが、建物小



第2図 一之口遺跡（6～7世紀）の掘立柱建物（県教委1994を一部改変）



第3図 一之口遺跡（6～7世紀）における集落の変遷（県教委1994を一部改変）

群は広い間隔をおきながら散在していたものと思われる。このような集落の様相に変化が生じるのは7世紀前半である。当期には4つの建物小群が確認でき、4～7棟（以上）の竪穴住居存在した。7世紀中葉には5つの建物小群が確認でき、竪穴住居の数も10～12棟（以上）に増加する。

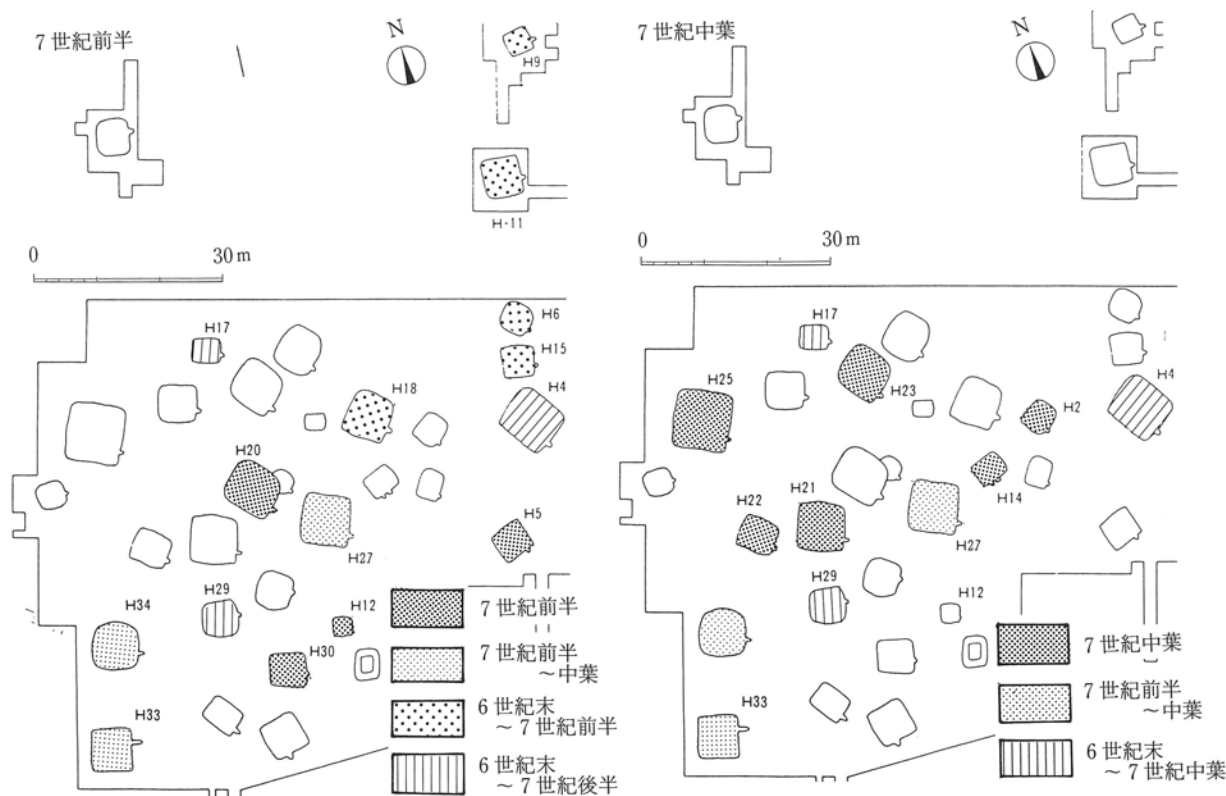
大型の竪穴住居は、6世紀前半～7世紀初頭にかけてはA群、7世紀前半にはC群、7世紀後半にはB群に存在し、一ヶ所に累世的に構築されるわけではない。また、大型の竪穴住居の存在する建物小群には、多くの竪穴住居から構成される場合がある。7世紀後半のC群は5棟の竪穴住居によって構成され、このなかに平面積50m²以上の竪穴住居が3棟含まれ、同時期の他の建物小群とは隔絶した様相が見られる。

山畑遺跡〔上越市教育委員会1978・1979〕

春日山東麓の丘陵上、上越市大字山畑に所在する。一之口遺跡とは隣接し、直線距離にして約600mである。6世紀末ないしは7世紀初頭に成立し、7世紀中葉まで存続した。竪穴住居を主体とする集落遺跡であり、掘立柱建物・井戸は確認できない（第4図）。平面積50m²を越える大型の竪穴住居が一定量存在し、最大の竪穴住居は平面積約90m²を計る。建物小群の抽出は難しいが、6世紀末から7世紀前半にかけては竪穴住居が4～14棟、7世紀中葉には6～11棟が確認できる。竪穴住居同士の間隔は狭く集村的な集落景観が想定できる。

須沢角地遺跡〔新潟県青海町教育委員会1988〕

西頸城郡青海町大字須沢角地に所在する。集落は7世紀末に成立し、9世紀末には一端廃絶するが、10



第4図 山畑遺跡における集落の変遷（上越市教育委員会1979を一部改変）

世紀後半には小規模な集落が短期間成立した。堅穴住居を主体とする集落であり、掘立柱建物⁵⁾・井戸は確認できない(第5図)。

7世紀末から8世紀初頭には5つの建物小群が確認でき、特にA群には5～8棟と多くの堅穴住居が存在し、規模も大型のものが多い。

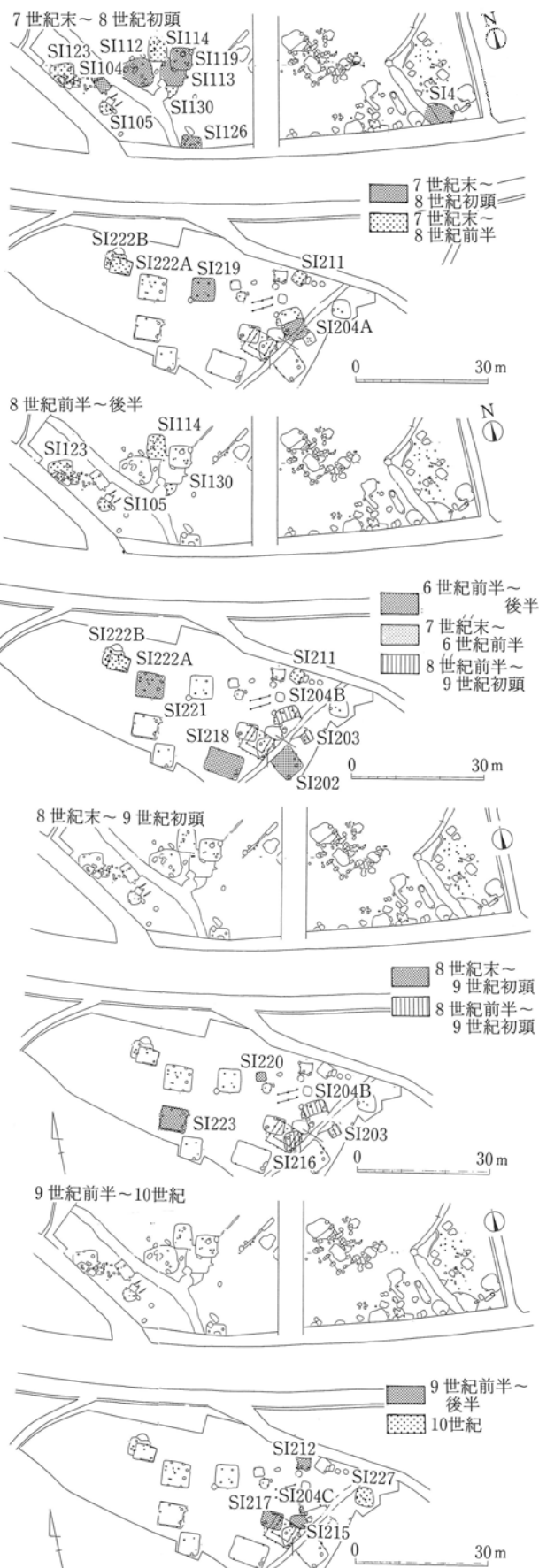
8世紀前半～8世紀後半には3つの建物小群が確認でき、4～11棟の堅穴住居が存在する。A群の堅穴住居の数は減少し、大型の堅穴住居はB群・C群に存在し、C群には多くの堅穴住居が存在するようになる。

8世紀末以降は堅穴住居の数が減少し、8世紀末から9世紀初頭には建物小群は3、堅穴住居は2～5棟となる。9世紀前半には平面積20m²前後の小型の堅穴住居3棟のみで構成される。10世紀後半には堅穴住居が1棟確認できるのみである。

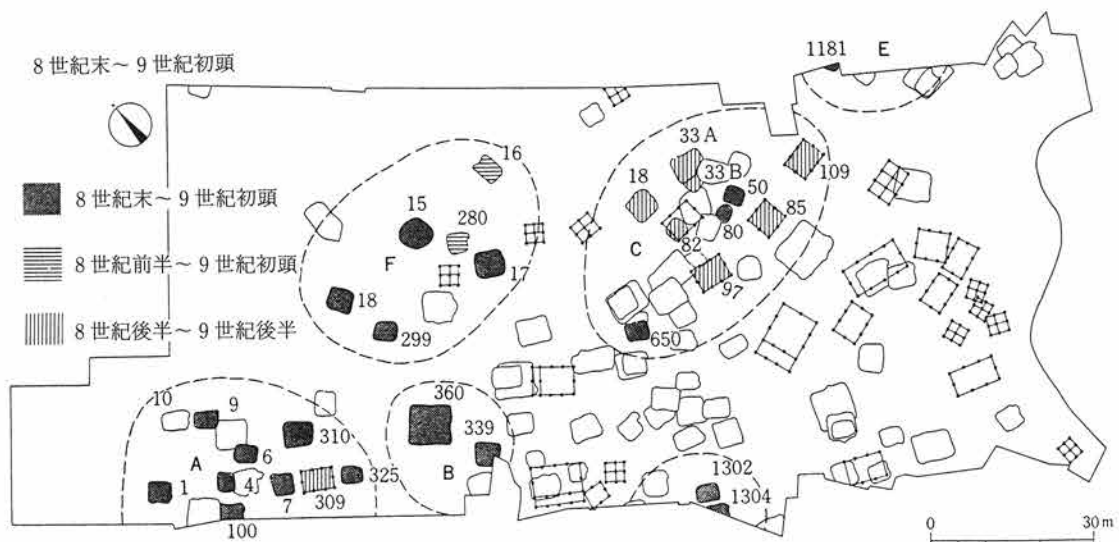
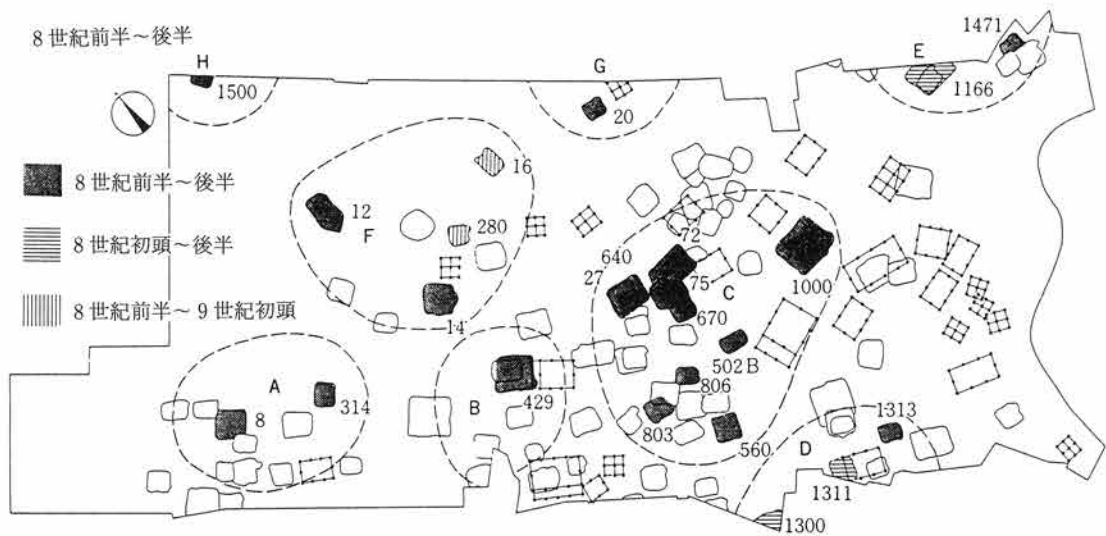
山三賀Ⅱ遺跡〔新潟県教育委員会1989〕

蒲原平野北側の砂丘上、北蒲原郡聖籠町大字三賀字白通に所在する。堅穴住居と掘立柱建物から構成されるが、掘立柱建物の数は少なく、堅穴住居が主体を占める。8世紀初頭に成立し、9世紀後半まで存続する。集落の変遷については坂井秀弥氏が明らかにされた〔坂井1989a〕。各時期とも4～6つの建物小群、20棟前後の堅穴住居・掘立柱建物が確認できる。倉庫は10棟が検出され、年代の特定できるものはほとんど存在しないが、8世紀初頭から9世紀初頭では特定の建物小群にともなうような状況は確認できない。また、井戸は検出されなかった。以下では坂井氏の変遷をもとに、建物小群と大型建物の動向を述べる(第6・7図)。

8世紀初頭には5つの建物小群が確認できる。平面積が50m²前後の大型の堅穴住居はSI115・610・1166・1315の4棟がありD群にはこのうち3棟が集中し、建物小群を構成する堅穴住居の数も多い。



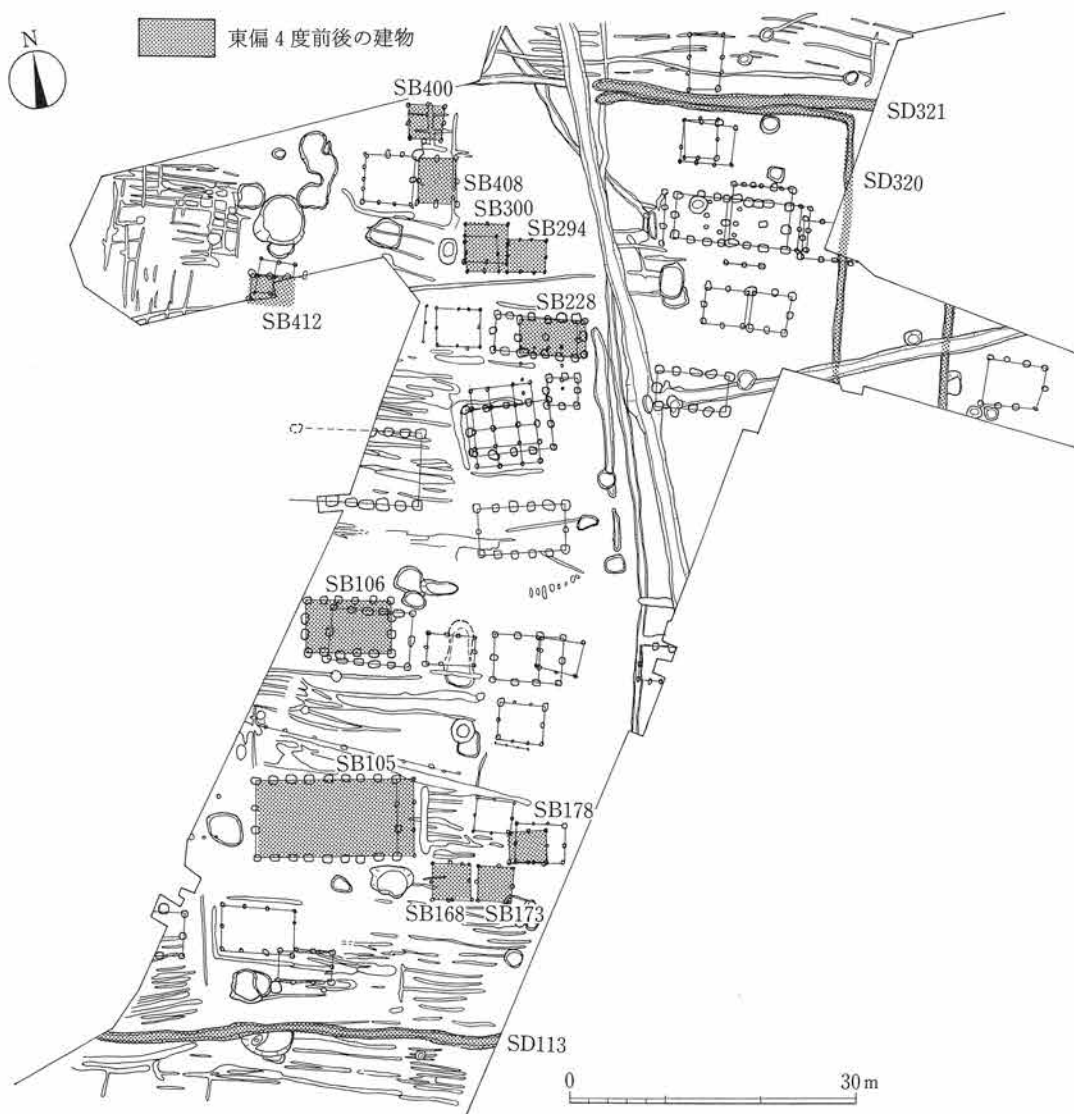
第5図 須沢角地遺跡における集落の変遷
(青海町教委1988を一部改変)



第6図 山三賀II遺跡における集落の変遷(1) (坂井1989を一部改変)



第7図 山三賀II遺跡における集落の変遷(2) (坂井1989を一部改変)



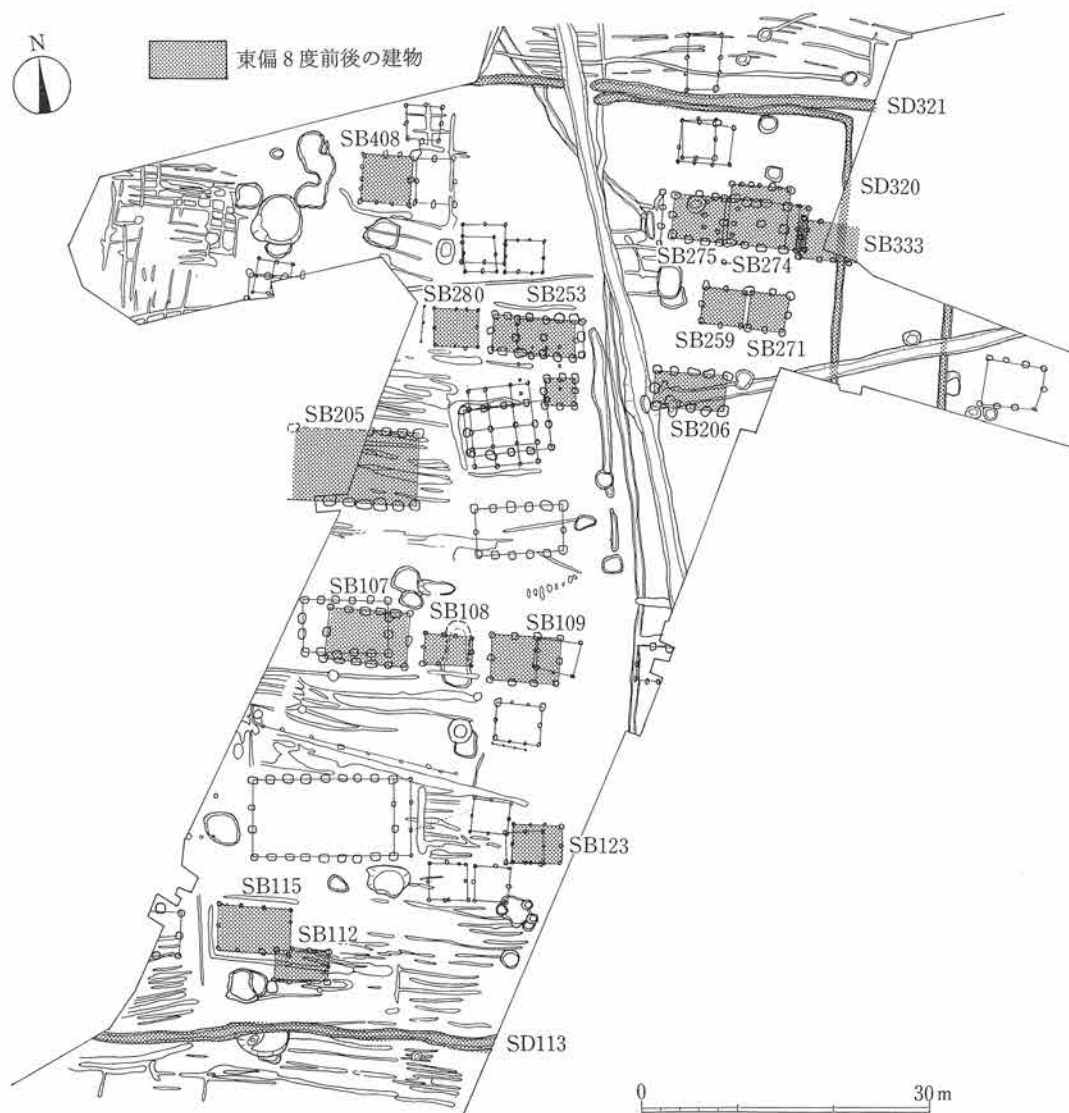
第8図 今池遺跡B地区遺構配置図(1) (県教委1984を一部改変)

8世紀前半から8世紀後半には7つ、8世紀末から9世紀初頭には6つの建物小群がある。大型の竪穴住居・掘立柱建物とともにB群・C群に存在し、B群を構成する建物の数は少ないが、C群は多くの竪穴住居・掘立柱建物から構成される大規模な建物小群である。

9世紀前半～後半には4つの建物小群が存在する。大型の竪穴住居は確認できなくなり、掘立柱建物がこれに変わる。平面積50m²をこえる掘立柱建物はB群にも存在するが、最大の平面積をもつ掘立柱建物は調査区の南側に新たに出現したJ群に存在する。J群は8棟の掘立柱建物と2棟の竪穴住居によって構成される建物小群であり、倉庫と考えるSB1162・1165・1370はこれらの建物小群に附随する可能性が高い。

今池遺跡〔新潟県教育委員会1984〕

新潟県の南西部にある頸城平野のほぼ中央部、関川左岸の自然堤防上に位置し、上越市大字今池・下新町に所在する。掘立柱建物を主体とする遺跡であり、約100棟の掘立柱建物が検出された。8世紀初頭に成立し10世紀初頭まで存続する。報告では前半期（8世紀初頭から9世紀初頭）と後半期（9世紀前半から10世紀初頭）では遺跡の性格が異なることが指摘されている〔新潟県教育委員会1984〕。



第9図 今池遺跡B地区遺構配置図(2) (県教委1984を一部改変)

前半期には大型の掘立柱建物を含む建物群が、A地区・B地区南半・C地区北半にそれぞれ確認できる(以下ではそれぞれA建物群、B建物群、C建物群と呼ぶ)。

B建物群は約40棟前後の掘立柱建物から構成される。南北および東側には建物群を区画する溝(SD113・320・321)があり、SD113とSD321の間隔は約一町(100m)である。掘立柱建物は、主軸方位が東偏4度前後のものと東偏8度前後のものがあり、4度のものが8世紀初頭から前半、8度のものが8世紀後半から9世紀初頭と推測でき、途中空白期間が存在した可能性が高い。

東偏4度のものは11棟が確認でき、南側のSB105を中心とする建物小群と北側のSB268を中心とする建物小群に分かれる。倉庫や井戸は確認できない(第8図)。

東偏8度前後のものは17棟の掘立柱建物が確認でき、建物小群は抽出しづらい。SB291は倉庫と推測でき、当期の最大のは掘立柱建物であるSB205に近接する。また南側と西側に存在する畝状遺構は当期に存在した可能性が高い(第9図)。

C建物群は、南北約80mのなかに約30棟の掘立柱建物が存在する。建物を区画する溝は確認できない。B群建物同様、掘立柱建物の主軸が東偏4度前後のものと東偏8度前後のものがある。遺構の切り合い関係などから東偏8度前後のものが古く8世紀初頭から前半、東偏4度前後のものが新しく8世紀後半から9世紀初頭と推測でき⁶⁾、B群とは逆になる(第10図)。

8世紀初頭から前半は2～3×7～8間で平面積60～70m²の掘立柱建物に2～3×3間で平面積の20m²前後の小型の掘立柱建物が1・2棟加わる建物小群が3つ併存する。またSB53は倉庫である可能性が高いが、特定の建物小群に帰属するような状況ではない。

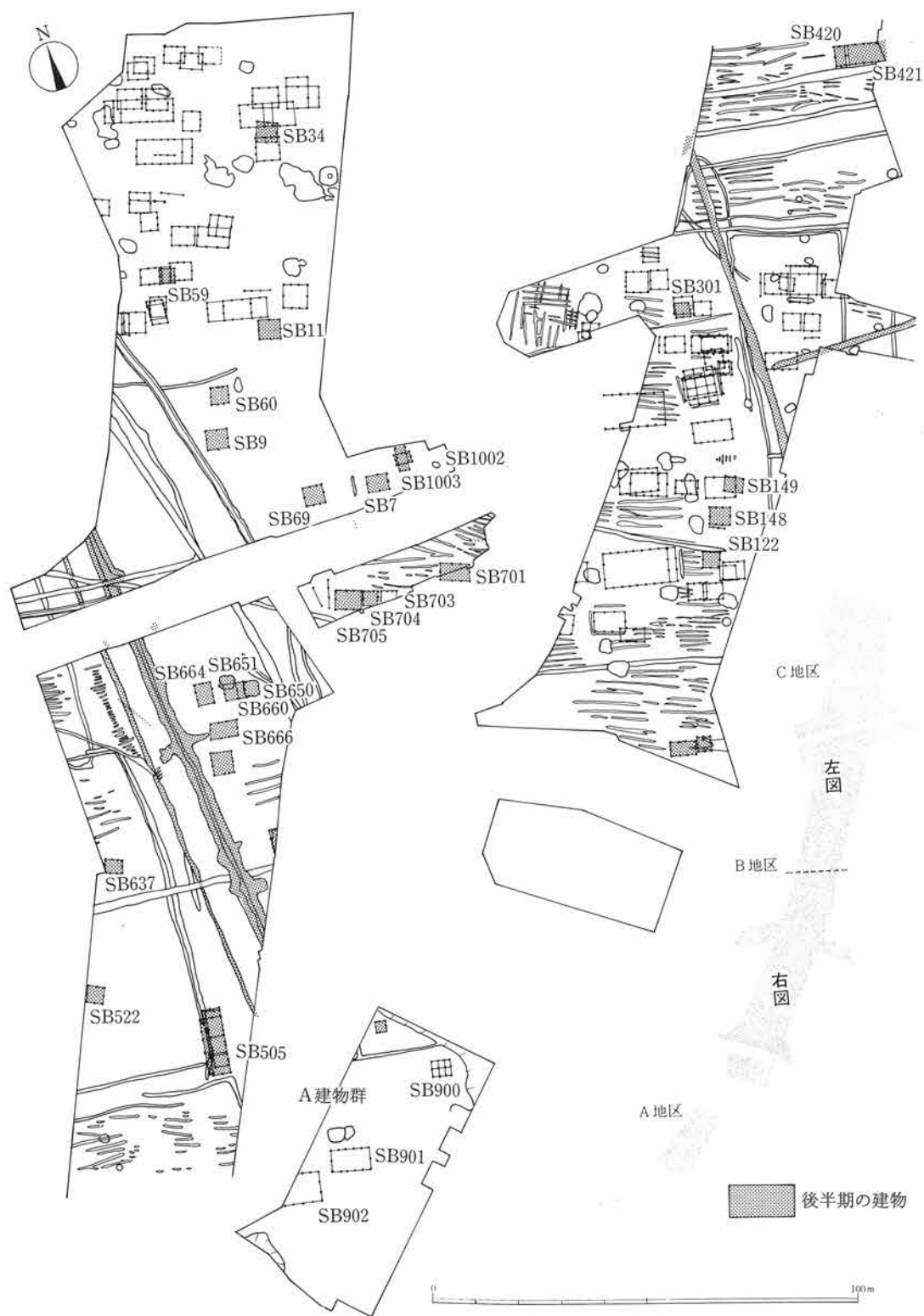
8世紀後半から9世紀初頭には17棟の掘立柱建物が確認できるが、建物小群は抽出しにくい。最大の掘立柱建物であるSB41に2×3間で平面積20～30m²の多くの掘立柱建物と倉庫(SB43)が近接して存在する。



第10図 今池遺跡C地区遺構配置図(県教委1984を一部改変)

A建物群は3棟の掘立柱建物が検出された(第11図)。建物群の中心は調査区西側に広がっているものと推測でき、詳細は不明であるが、3×3間の総柱建物であるSB900は他の2棟とは離れて存在する。

9世紀前半から10世紀後半は大型の掘立柱建物を含む建物群が確認できなくなり、建物小群が広範に散在して存在するようになる⁷⁾(第11図)。これらの建物小群に付属すると思われる土坑は存在するが井戸は確認できない。また当期の掘立柱建物はSB505・421にみるように大型のものも存在するが、2～3×4間、



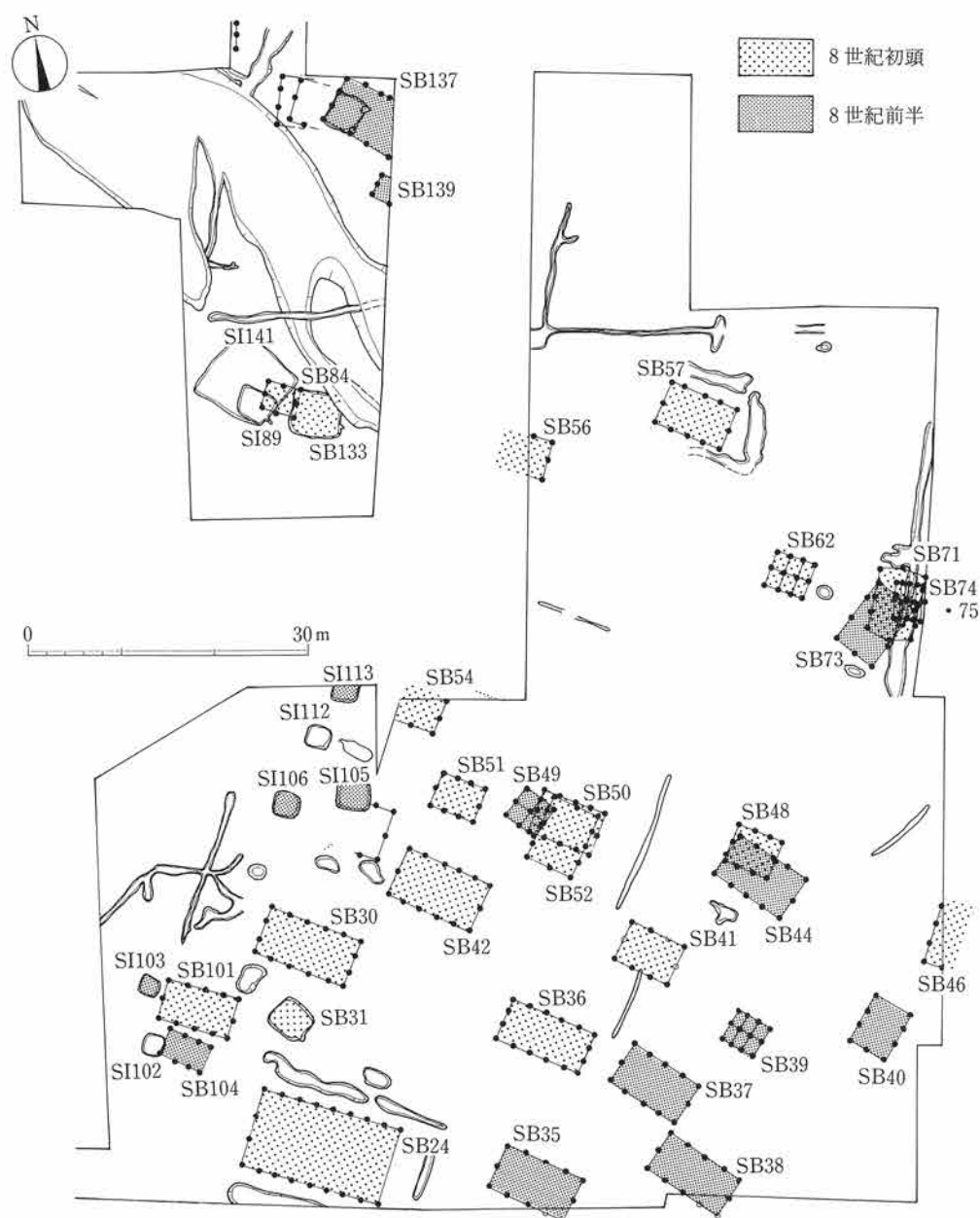
第11図 今池遺跡全体図(県教委1984を一部改変)

平面積20～40m²前後のことが多い。建物小群同士の間隔は広く、ここには畝状遺構が存在する場合があります、畑地として利用されることもあった。

栗原遺跡〔新潟県教育委員会1982・1983、新井市教育委員会1984〕

頸城平野の南西部、関川と矢代川に挟まれた舌状の台地上に位置し、新井市大字栗原に所在する。遺跡の存続期間は7世紀後半ないしは末から8世紀前半と比較的短い。掘立柱建物約30棟、竪穴住居12棟が検出された。竪穴住居は7世紀後半まで遡る可能性があるものも存在するが、大半が8世紀初頭から8世紀前半のもので、竪穴住居と掘立柱建物は併存した。掘立柱建物には東偏15度前後のものと東偏20度前後のものがあり、雨落ち溝出土土器から東偏15度前後のものが古く8世紀初頭、東偏20度前後のものは8世紀前半と推測できる（第12図）。

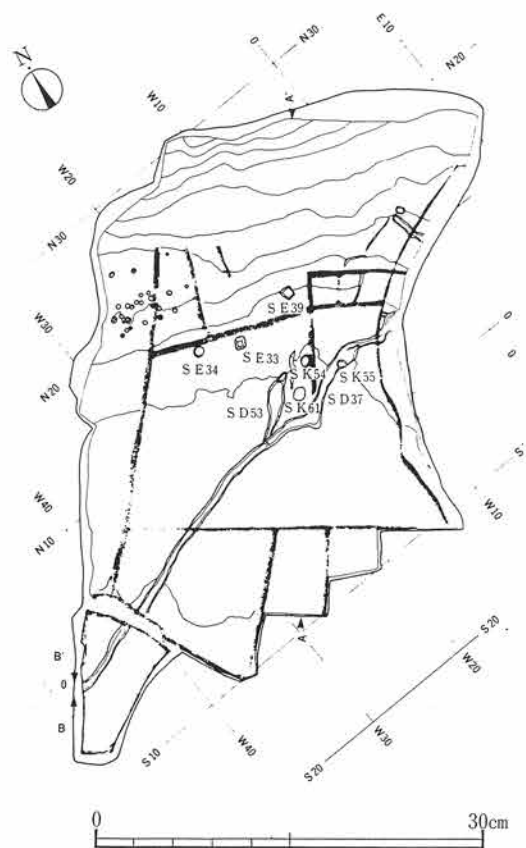
8世紀初頭の建物は調査区の北側と南側に分布が分かれる。南側の建物群は11棟の掘立柱建物と竪穴住



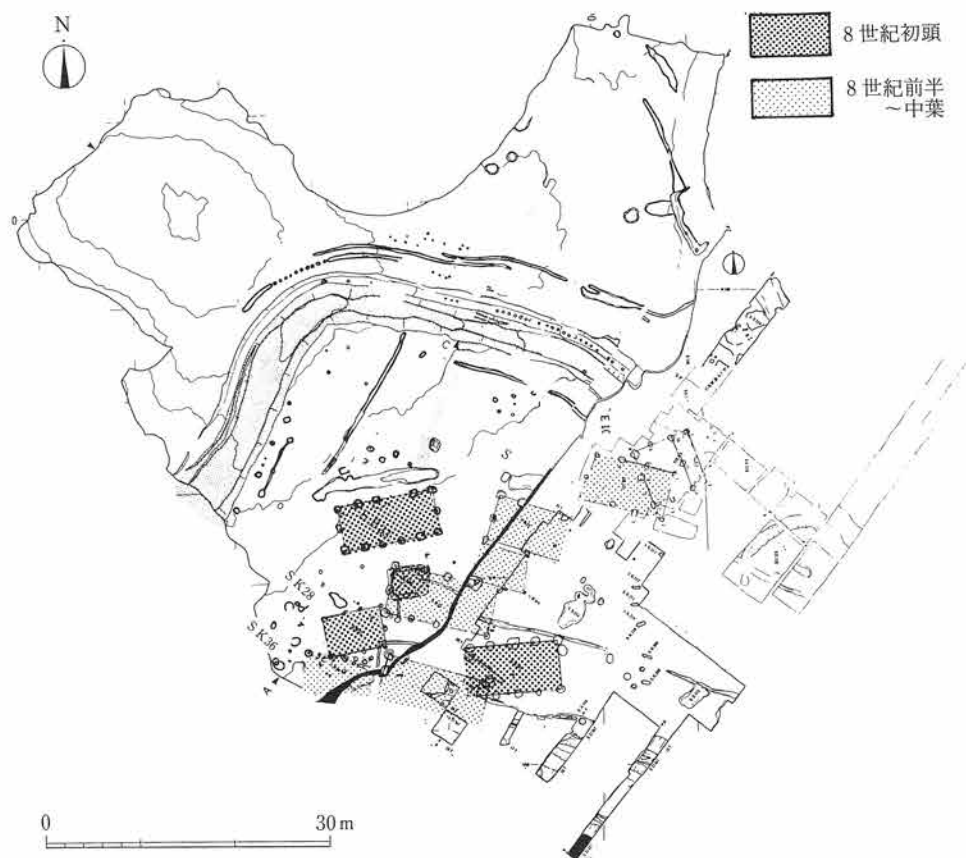
第12図 栗原遺跡遺構配置図（新井市教委1984を一部改変）



第13図 八幡林遺跡全体図
(和島村教委1993を転載)



第14図 八幡林遺跡A地区遺構配置図
(和島村教委1992を転載)



第15図 八幡林遺跡B地区遺構配置図 (和島村教委1992、1993を改変)

居1棟により構成される大規模なものであり、本遺跡で最大の掘立柱建物SB24がある。井戸・倉庫は確認できない。北側の建物小群は掘立柱建物5棟と竪穴住居1棟により構成される。最大の掘立柱建物はSB57であり、平面積約40m²の中型のものである。建物小群に付属する倉庫としてはSB62があるが、井戸は確認できない。

8世紀前半には建物小群が4つ確認できるが、8世紀初頭にみたような大型の掘立柱建物を伴う建物小群は確認できない。調査区南西側の建物小群は掘立柱建物6棟により構成され、最大の掘立柱建物は平面積約50m²のSB64である。倉庫は2棟（SB39・49）が確認できる。また調査区南西には竪穴住居を主体とする建物小群が出現した。

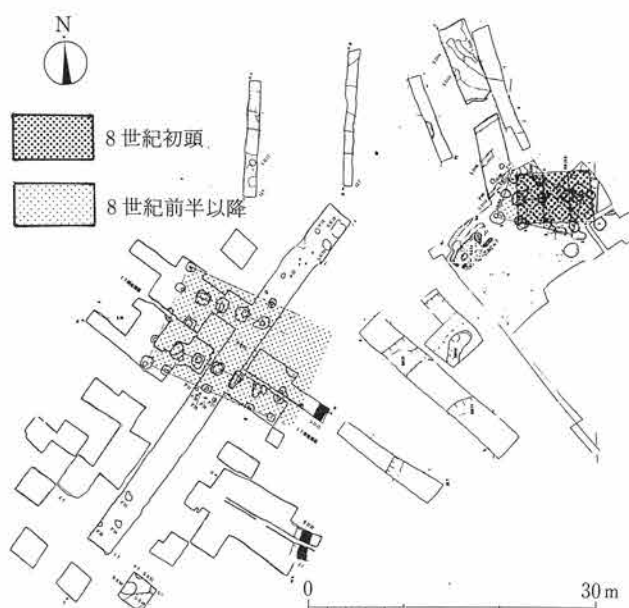
八幡林遺跡〔新潟県和島村教育委員会1992・1993・1994a〕

新潟県のほぼ中央部、新潟県和島村大字島崎字八幡林に所在する。遺跡は島崎川左岸に位置し、丘陵・低地をとりこみ広範に展開する(第13図)。遺跡の存続期間は8世紀前半から10世紀初頭と長期にわたるが、地点により遺構の内容・年代は異なる。以下では、A・B・C・I地区について年代と遺構の概要を述べる。

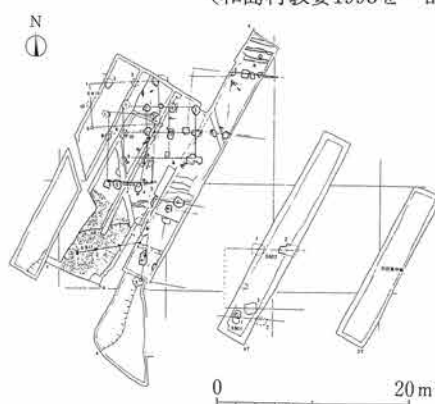
A地区では住居跡は確認されなかったが、井戸3基・土坑・溝が検出された。井戸には方形の井戸側を持つものがある。また溝からは「沼垂城」「郡司符」木簡のほかには斎串や人形などの祭祀関連遺物が出土した。包含層から出土した土器には8世紀前半から中葉のものと9世紀後半から10世紀初頭のものがあるが、前述した井戸・溝は8世紀代のものである⁸⁾(第13図)。

B地区は掘立柱建物10棟、竪穴住居1棟が検出された。存続期間は8世紀前半から中葉であり、掘立柱建物の方向は方位にほぼ一致するものと、南に約10度振るものがある。検出された1棟の竪穴住居は主軸がほぼ東西方向を向き、出土土器が8世紀前半である。このことから、方位に一致するものが古く8世紀前半、南に振るものが8世紀中葉と考える。掘立柱建物は30～50m²であり、最大のものは2×5間のSB33、平面積は約60m²となる(第15図)。

C地区では3棟の掘立柱建物が検出された。建物の主軸の方向はSB02・16Aが南に約10度前後振り、SB16Bが方位にほぼ一致する。B地区の掘立柱建物の変遷から考えると、



第16図 八幡林遺跡C地区遺構配置図
(和島村教委1993を一部改変)



第17図 八幡林遺跡I地区遺構配置図
(和島村教委1993より転載)

SB16Bが8世紀前半、SB16A・02が8世紀中葉となるが、SB02は柱穴内から土器が出土しており、土器の型式から考えると9世紀代に下る可能性が高い。SB02は身舎が2×5間で四面に底を持つ本遺跡最大の掘立柱建物であり、平面積は約180m²を計る大型のものである（第16図）。

I地区では掘立柱建物が8棟検出された。これらの掘立柱建物は丘陵の斜面を平坦に造成したうえに建てる。調査区の面積が少ないため土坑・井戸などの様相は不明である。年代は9世紀末から10世紀初頭ないしは前半である。全体の規模が分かる掘立柱建物は3棟であり、いずれも30m²前後であるが、SB5・6のように50m²をこえたと推測できる比較的大型の掘立柱建物も存在する（第17図）。

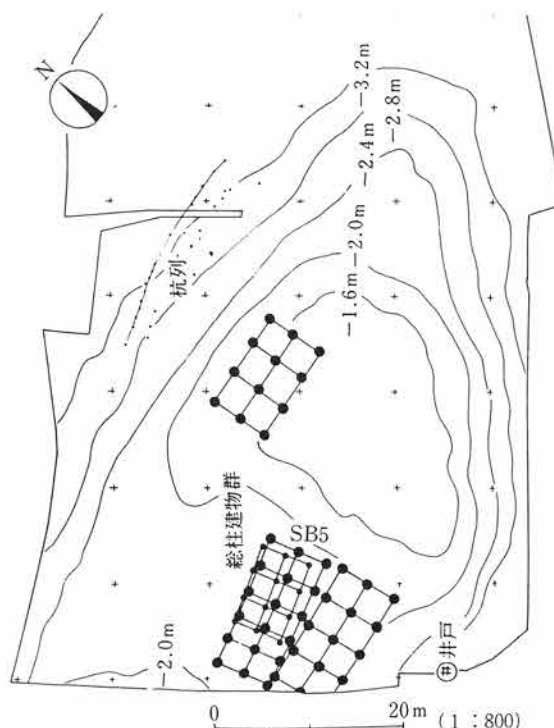
緒立C遺跡〔新潟県黒崎町教育委員会1993〕

西蒲原郡黒崎町字川根湯に所在し、信濃川左岸の砂丘上に位置する。古墳時代前期の集落が廃絶したのち、400年近くの空白期間を置いて、8世紀前半にふたたび集落？が成立するが、遺跡の最盛期は出土土器から考え8世紀後半から9世紀後半であり、9世紀末から10世紀初頭には廃絶する。奈良・平安時代の遺構としては、5棟の掘立柱建物が検出された（第18図）。

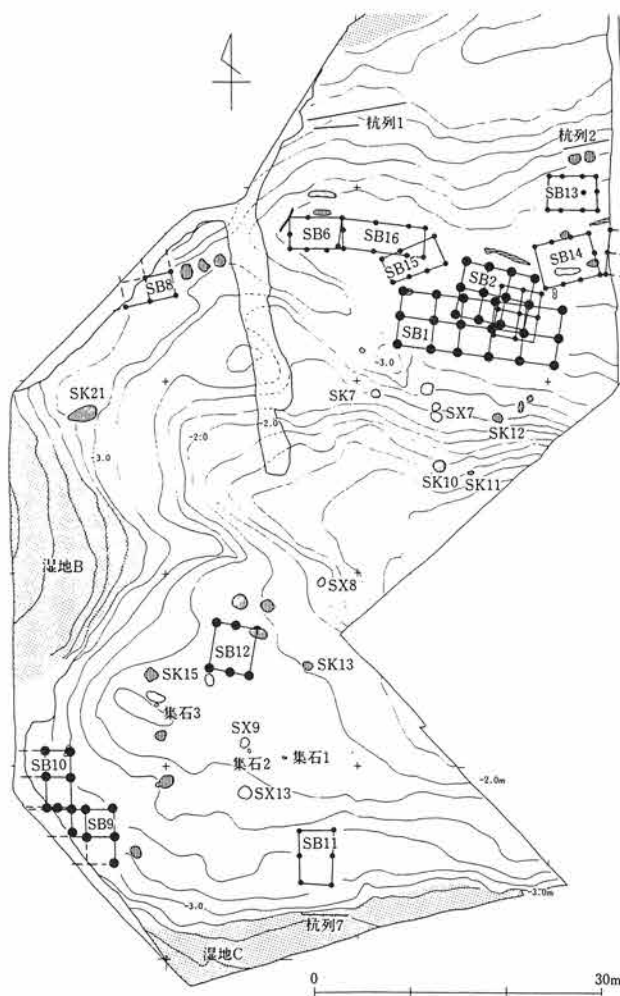
SB1・3・5は重複しており、同時存在したものは1～2棟であろう。5棟の掘立柱建物はいずれも2×3～5間の総柱である。最大の建物であるSB5は平面積90m²とかなり大型のものである。

的場遺跡〔新潟市教育委員会1991・藤塚1993・新潟市史編さん原史古代中世部会1994〕

新潟市小新字的場に所在し、信濃川左岸の砂丘上に位置する。緒立遺跡とは直線距離にして約500mと隣接し、相互に関連を持つ遺跡



第18図 緒立C遺跡遺構配置図（藤塚1993を転載）



第19図 的場遺跡遺構配置図
（新潟市史編さん原史古代中世部会1994を転載）

であろう。緒立遺跡同様、古墳時代前期の集落が廃絶したのち、約400年間の空白期間において8世紀初頭に成立し10世紀後半までは存続する。調査では掘立柱建物13棟が検出された。このうち6棟は総柱であり、倉庫と推測できる。倉庫のなかには2×5間と長大なものがある(第19図)。遺構の変遷については明確にできない。

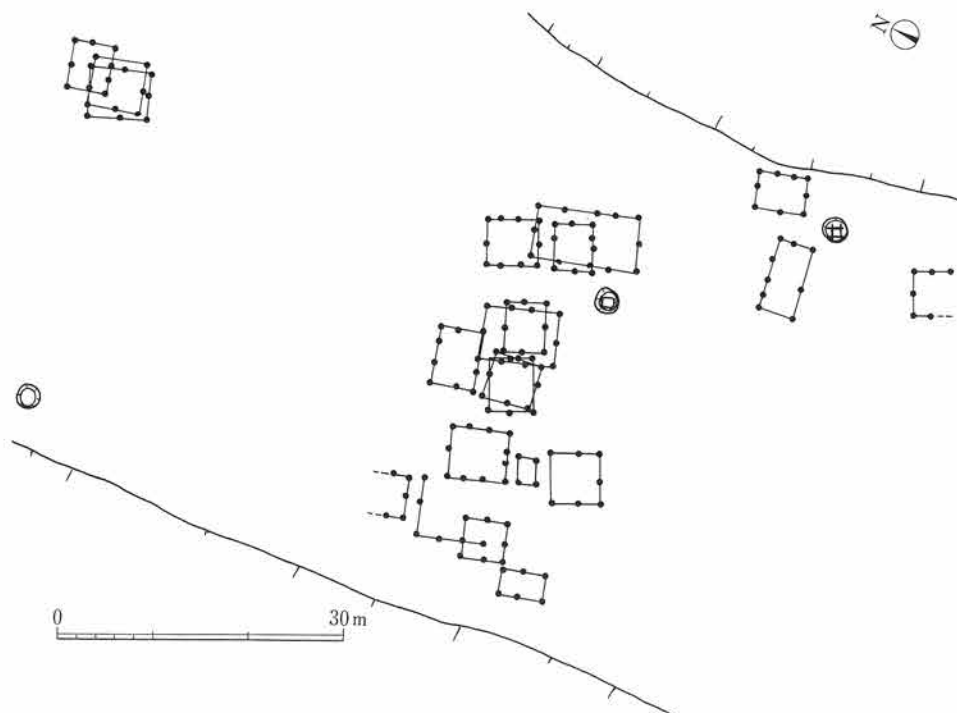
曾根遺跡〔新潟県豊浦町教育委員会〕

蒲原平野の北側、沖積平野の微高地に位置し、新潟県北蒲原郡豊浦町に所在する。8世紀前半に成立し、9世紀末まで存続した。掘立柱建物を中心とする集落遺跡であり、竪穴住居は確認できない。ただし、掘立柱建物は最大のものでも2×4間(平面積は約60m²)であり、2×2～3間で平面積20～30m²と小型の掘立柱建物が大半を占める。掘立柱建物の分布はおおむね3つのグループに分かれ、このうち発掘区南側と中央部の建物小群は方形の井戸側をもつ井戸が確認できる(第20図)。

古町B遺跡〔吉川町教育委員会1991〕

中頸城郡吉川町大字西野島字上脇原に所在する。頸城平野の北東部、東頸城丘陵の末端に立地し、沖積平野との比高差は約5mを計る。縄文時代、奈良・平安時代、中世の複合遺跡であり、奈良・平安時代は8世紀前半から後半、9世紀前半から後半、中世は13世紀と15世紀後半から16世紀の2時期がある。

東偏25度前後の掘立柱建物および竪穴住居が8世紀前半から後半の遺構、東偏30～50度前後の掘立柱建物は明確な時期比定ができないが、9世紀前半～後半ないしは13世紀代のものと推測する(第21図)。8世紀前半から後半は3つの建物小群があり、このうちa群・b群は平面積約100m²の大型の掘立柱建物⁹⁾を中心とし、これに1・2棟の中小型の掘立柱建物と竪穴住居が加わる類似した構成である。c群は大半が調査区外に広がる可能性が高く詳細は不明である。3つの建物小群とも井戸と倉庫は確認できない。建物小群同士の間隔は広いが、建物小群の主軸方向と一致もしくは直交する畝状遺構は確認できず、畑地として



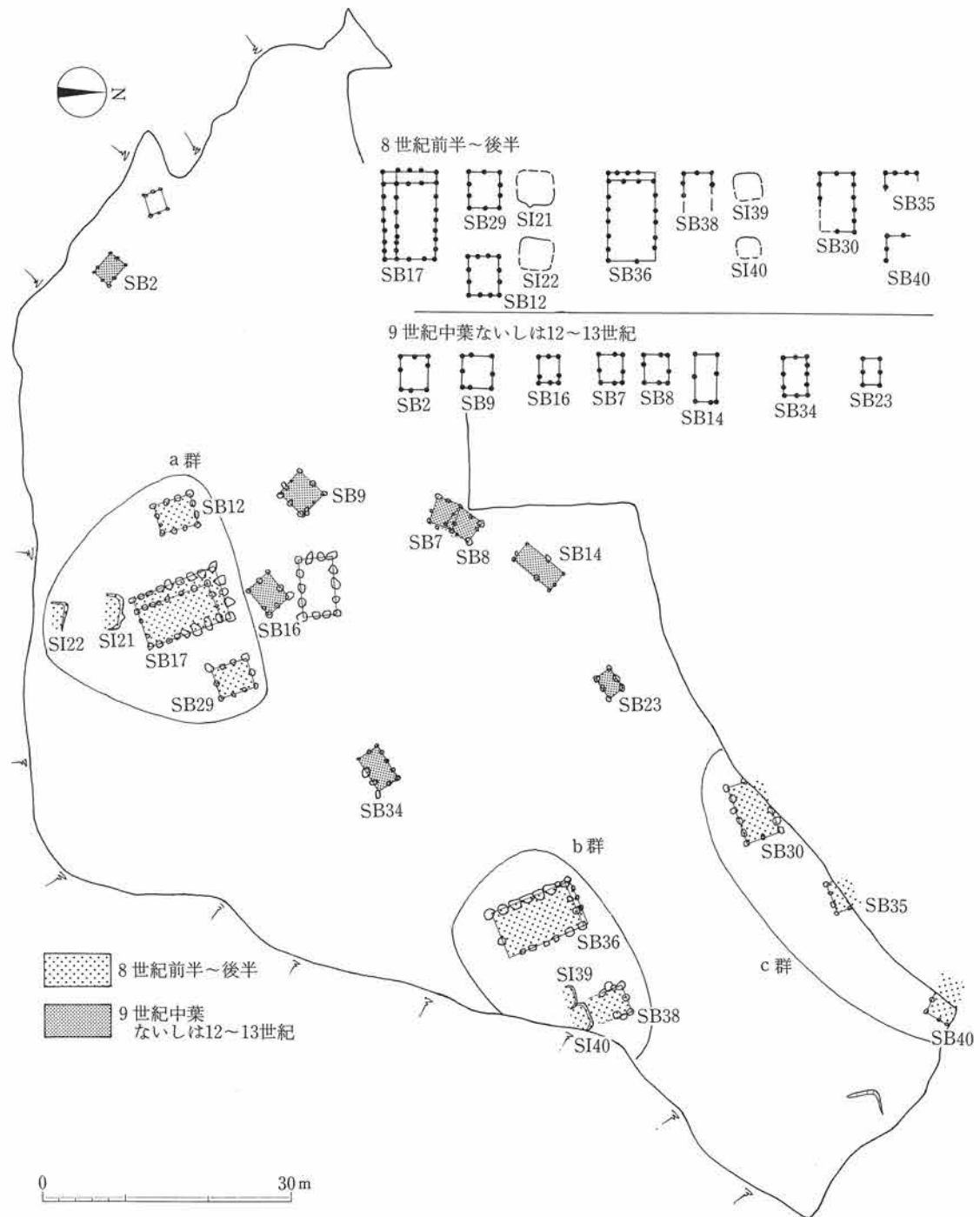
第20図 曾根遺跡遺構配置図(豊浦町教委1982を一部改変)

は利用されなかったものと推測する。

東偏30～50度前後の掘立柱建物は、調査区のはば中央に馬蹄形に7棟（SB7・8・9・14・16・23・34）、調査区西側に1棟（SB2）確認できる。建物の大半は2×3～4間もしくはそれ以下の小型の掘立柱建物である。8世紀前半から後半と同様に建物小群同士の間隔は広いが、畝状遺構は確認できない。

岩野下遺跡〔新潟県教育委員会1987〕

新潟県の南西端近く、梅川左岸の段丘上に位置し、糸魚川市大字大和川字岩野に所在する。遺跡の存続



期間は8世紀前半から後半・9世紀末から10世紀初頭・10世紀後半から末の3時期があるが、このうち10世紀後半から末の遺構の様相は明確でない。

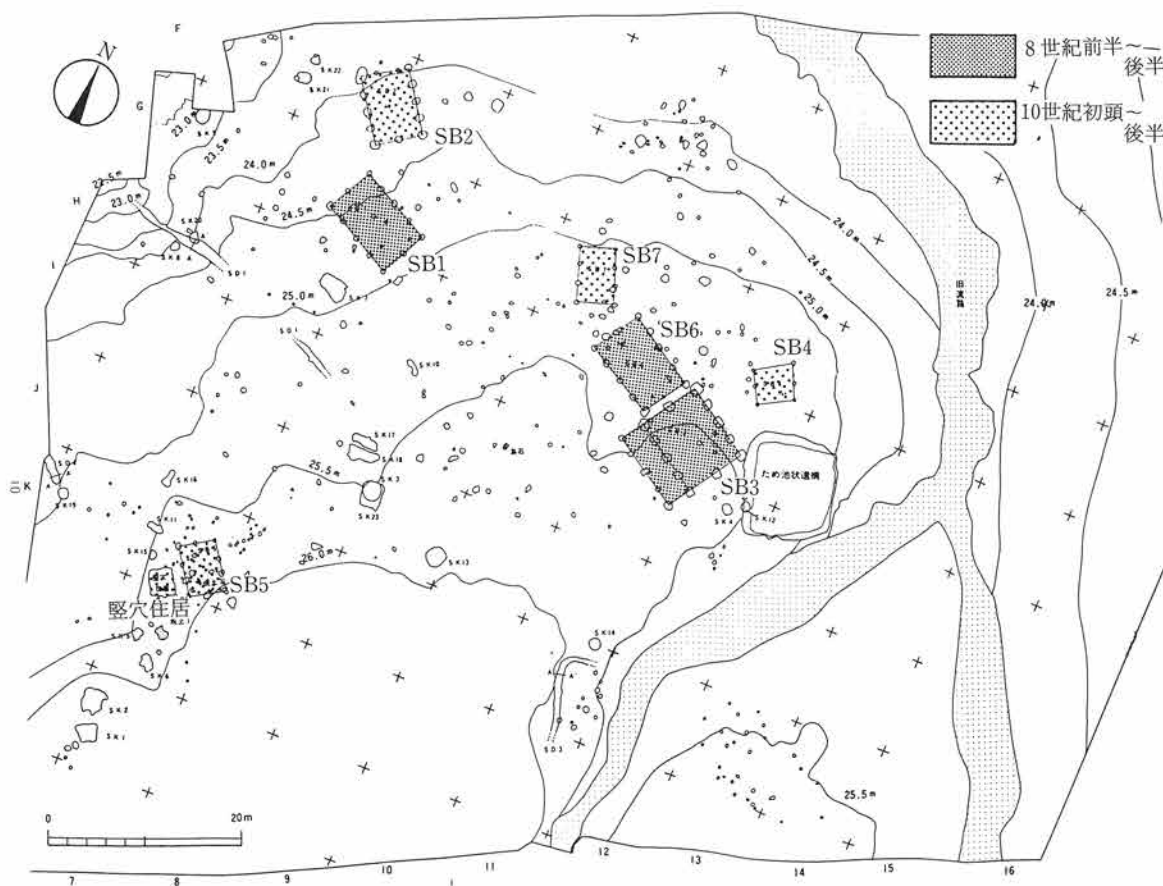
掘立柱建物7棟・竪穴住居1棟・土坑・ピットが検出された。掘立柱建物には西偏60度前後のものと西偏20～30度前後のものがある。掘立柱建物の柱穴・掘立柱建物に隣接する土坑出土の土器から、西偏60度前後のものが8世紀前半から後半、西偏20～30度前後のものが9世紀末から10世紀初頭と考える。また、竪穴住居は9世紀末から10世紀前半のものである(第22図)。

8世紀前半から後半はSB1・3・6の3棟が存在するが、井戸・倉庫・畝状遺構は確認できない。SB3は3×4間で南西側に底を持つ平面積70m²前後の大型の掘立柱建物、他の2棟は平面積40m²である。

9世紀末から10世紀前半の遺構には掘立柱建物4棟・竪穴住居1棟があるが8世紀前半から後半と同様に井戸・倉庫・畝状遺構は確認できない。掘立柱建物は2×4間、2×3間、1×3間、1×2間がそれぞれ1棟ずつ確認できる。SB5と竪穴住居は隣接するが、他の掘立柱建物は1棟ずつ単独で存在する。

岩田遺跡〔越路町教育委員会1990〕

新潟県のほぼ中央部、信濃川左岸の小扇状地上に位置し、三島郡越路町大字沢下条字岩田に所在する。遺跡の存続期間は8世紀後半から9世紀前半である。掘立柱建物4棟・柵列・土坑・畝状遺構が検出された(第23図)。掘立柱建物の平面積は30m²前後のものが3棟、20m²弱のものが1棟である。SB2・3は重複するが、検出された掘立柱建物4棟の主軸はいずれも同一であり、近接した時期のものであろう。また調査区の南側に広がる畝状遺構は掘立柱建物と同一方向であり、同時存在した可能性が高い。井戸・倉庫は確認できない。



第22図 岩野下遺跡遺構配置図(県教委1987aを一部改変)

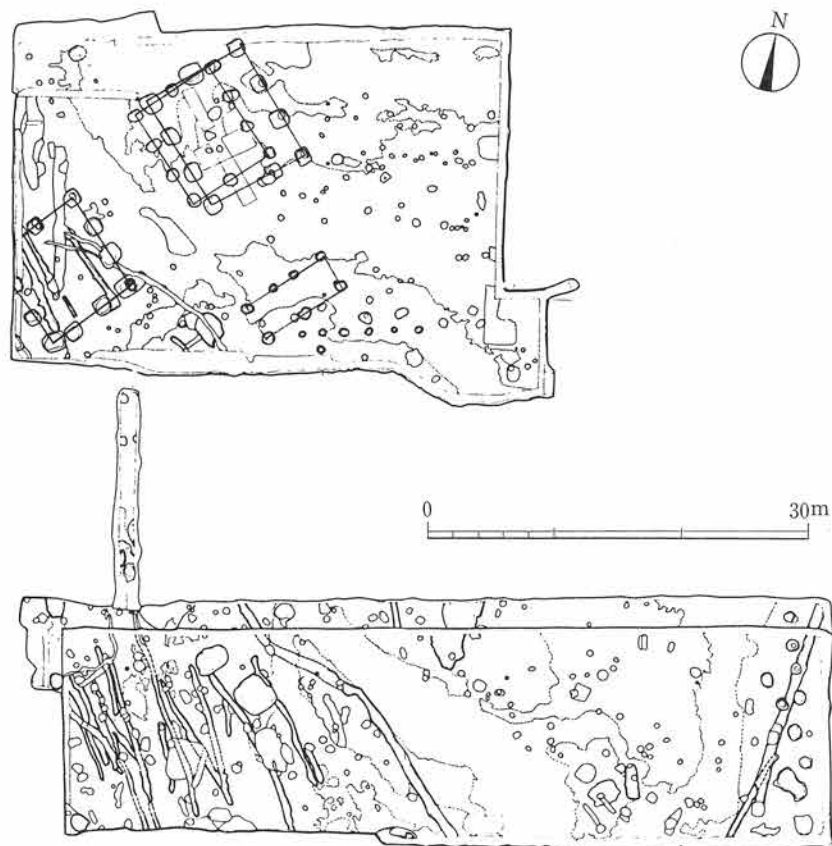
一之口遺跡〔新潟県教育委員会1986、新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団1994〕

頸城平野の西部、関川右岸の自然堤防上に位置し、上越市大字寺分・中屋敷・木田に所在する。ここでは8世紀から10世紀の遺構について坂井秀弥氏〔坂井1988〕・鈴木俊成氏〔鈴木1989〕の考察に添って遺跡の概要を述べる（第24図）。

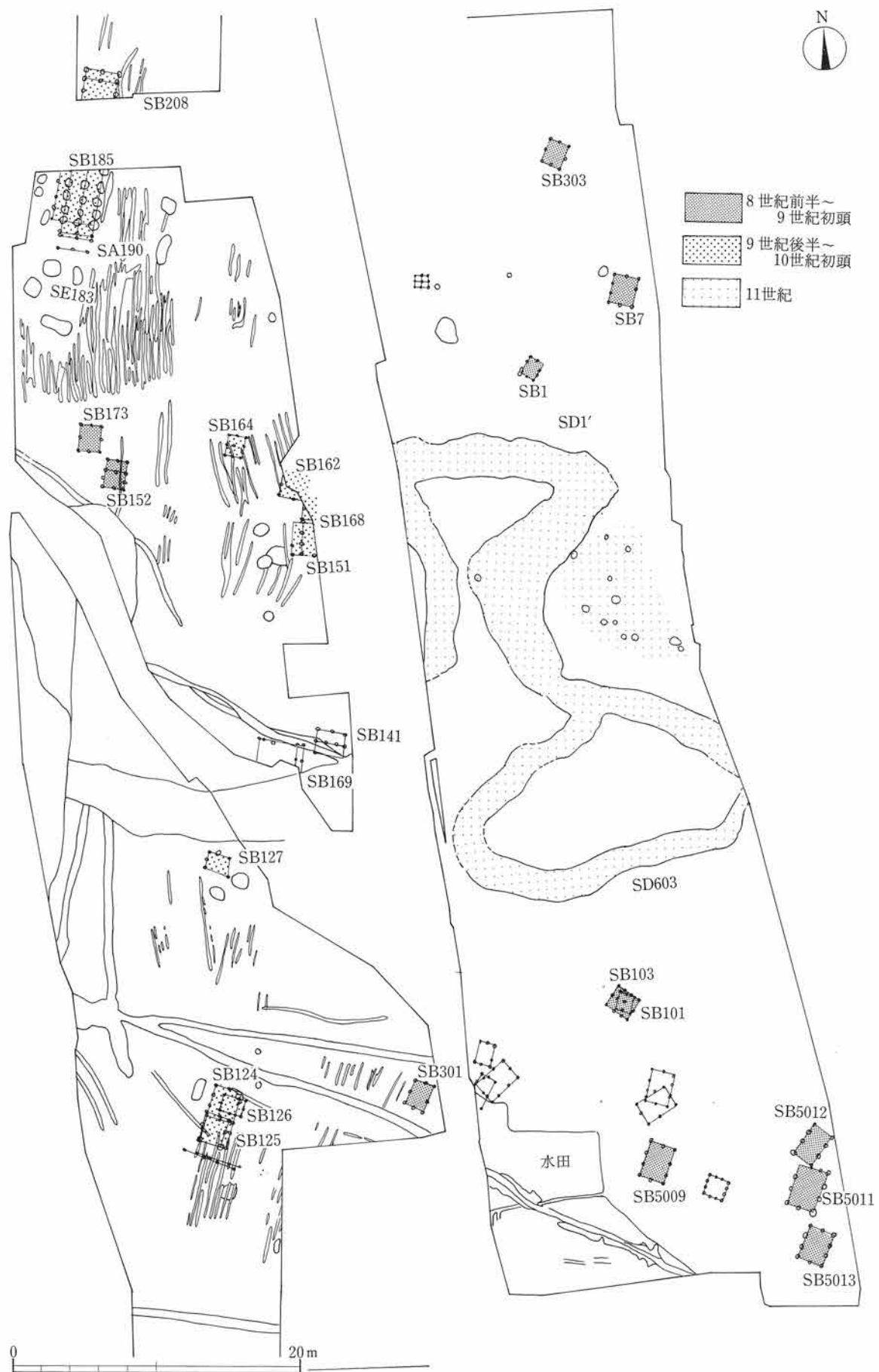
6～7世紀の集落が廃絶した後、約100年前後の空白期間において、8世紀後半を前後する時期に再び集落が営まれる。8世紀後半から9世紀後半の遺構には東地区に散在する掘立柱建物がある。また西地区のSB301・152・173もこの時期である可能性が高い¹⁰⁾。掘立柱建物の規模は2×3間、平面積20～30m²前後の小型のものが多く、平面積50m²を越えるものは確認できない。主軸の方向は東偏20度前後のものが大半を占める。建物小群は1～3棟の掘立柱建物から構成される場合が多く分布は散漫である。建物小群に土坑がともなう場合はあるが、井戸・倉庫が伴う例はない。また、建物小群同士の間隔は広いが、周辺に畝状遺構が広がる建物はSB301のみであり、他の建物には確認できない。

10世紀初頭から後半の遺構は調査区西側を中心に存在し、これについては坂井秀弥氏が考察を加えられた〔坂井1988〕。以下では坂井氏の考察にそって概要を述べる。当期には1～3棟の掘立柱建物によって構成される4つの建物小群が土坑・井戸・畑地を伴い併存する。建物小群の間にはかなりの格差が見られ、C群は1×2間で小型の掘立柱建物のみで構成されるが、A群は3×4間以上、平面積70m²以上の大型で総柱となる掘立柱建物(SB185)を中心とする。この東側には目隠し塀と考えられるSA190、方形の井戸側をもつSE183が存在し、他の建物小群とは隔絶した様相を持つ。

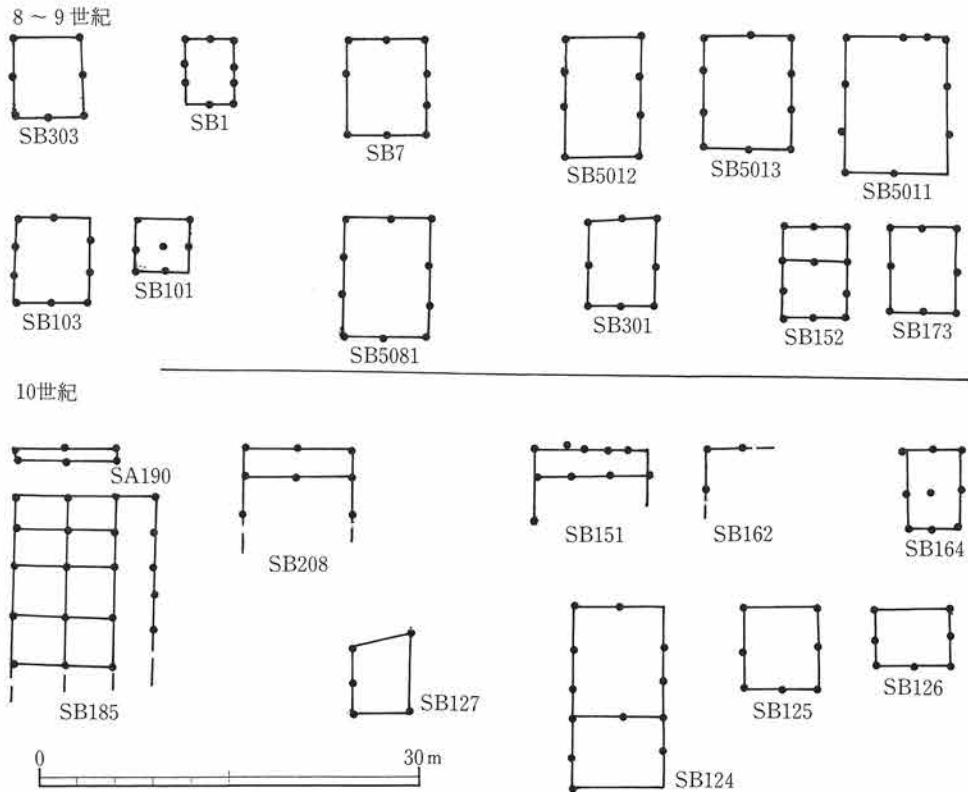
11世紀以降は建物跡は確認できない。ただし、調査区西側中央付近にある井戸は、11世紀前半から12世紀前半のものである。形態はいずれも素掘りで小型のものである。またSD1'・SD603からは11世紀代の遺



第23図 岩田遺跡遺構配置図（越路町教委1990を転載）



第24図 一之口遺跡遺構配置図（8～11世紀）



第25図 一之口遺跡の掘立柱建物（8～10世紀）

物が多く出土している。

金屋遺跡〔新潟県教育委員会1985〕

新潟県の南西部、南魚沼郡六日町大字余川字金屋道上に所在し、魚野川の支流である庄之又川が形成した扇状地の扇央部に位置する。

縄文時代、古墳時代中・後期、平安時代の複合遺跡である。古墳時代後期の集落が廃絶した後、約300年の空白期間をおいて9世紀前半に再び集落が形成される。以後11世紀初頭ないし前半まで遺跡は存続した。ただし、10世紀前半～10世紀末の遺構としてはSX20があるのみで、他の遺構は明確でない。調査では掘立柱建物6棟・竪穴住居10棟・柵・土坑・溝などが検出されたが、井戸・畝状遺構・倉庫は検出されていない（第26図）。

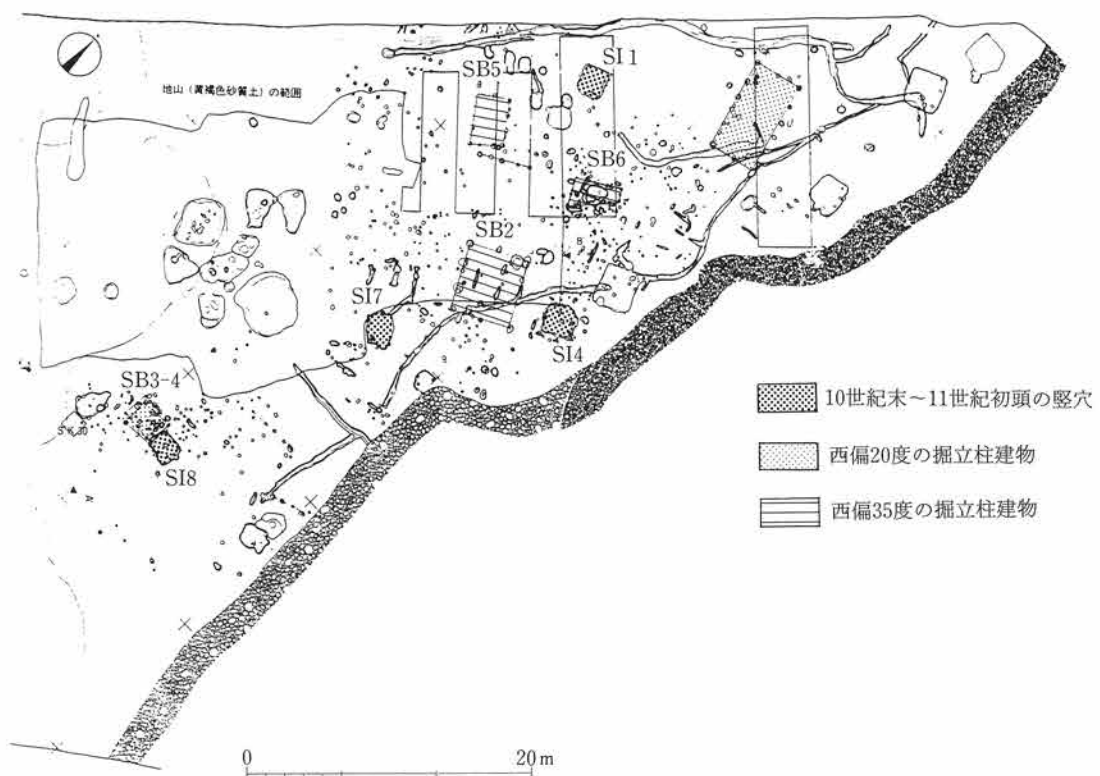
竪穴住居は9世紀前半から10世紀初頭のものが5棟、11初頭ないしは前半のものが4棟確認できる。また掘立柱建物には西偏20度前後のものと西偏35度前後の2種があるが、どの方向のものがいつの時期のものかは明確にできない。

集落の変遷については明らかにしないが、遺構の分布から3～4つの建物小群が存在する。平面積約50m²の比較的大型の掘立柱建物を中心としこれに小型の掘立柱建物ないしは竪穴住居が数棟が加わり建物小群を構成するもの、小型の掘立柱建物と竪穴住居1棟のみで構成されるものがあり、建物小群間およびその内部には階層差が存在する。

9世紀前半～10世紀初頭



10世紀末～11世紀初頭



第26図 金屋遺跡における集落の変遷（県教委1985を改変）

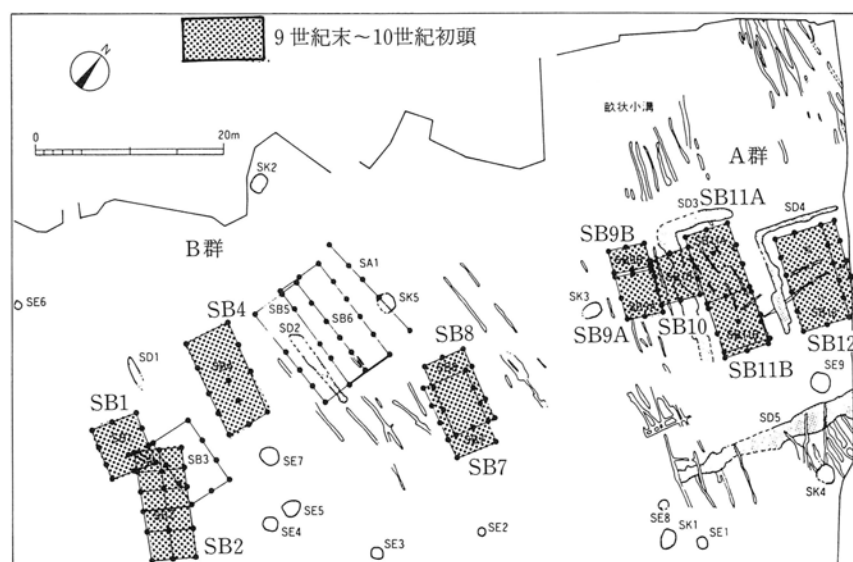
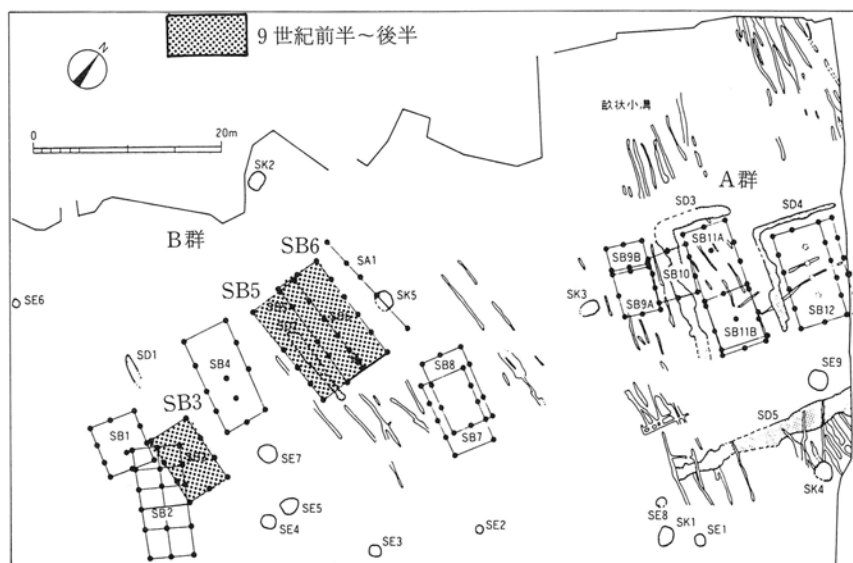
小丸山遺跡〔新潟市教育委員会1987〕

蒲原平野の中央部、現在の信濃川と阿賀野川の河口に挟まれた砂丘上に位置する。遺跡は9世紀前半に成立し、10世紀後半まで存続するが、10世紀後半の遺構の様相は明確でない。調査では掘立柱建物14棟・井戸8基・土坑・溝・畝状遺構などが検出された（第27図）。

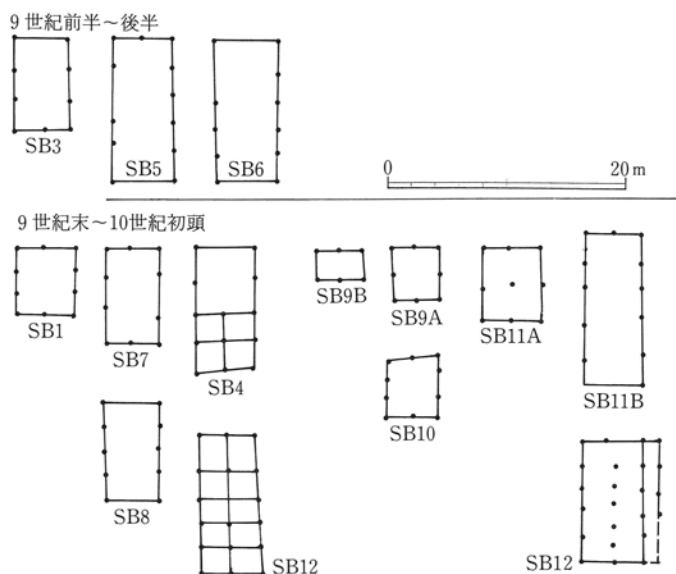
建物小群は調査区北側のA群と南側のB群の2つがある。主軸方向には東偏 度前後のものと東偏 度前後のものが古く9世紀前半から後半、東偏 度のものが9世紀末から10世紀前半である可能性が高い。

9世紀前半から後半は3棟の掘立柱建物が確認できる。いずれもB群に属するが、SB5・6は重複しており、3棟が同時存在したわけではない。SE7はこの建物小群に伴うものとする。

9世紀末から10世紀前半にかけては建物の数が増加する。建物小群は2つ存在し、A群は5棟、B群は6棟の掘立柱建物が確認できる。掘立柱建物のなかには重複するものがあり、同時に存在し



第27図 小丸山遺跡における集落の変遷（新潟市教委1984を変遷）



第28図 小丸山遺跡の掘立柱建物

たものは各建物小群とも2～3棟であろう。2つの建物小群はともに井戸・土坑・畝状遺構が伴い、本遺跡で最大の掘立柱建物SB12が存在するA群に伴うSE9は方形の井戸側を持つ。

下新町遺跡〔新潟県教育委員会1984〕

今池遺跡の北側、上越市大字下新町に所在し、沖積平野の微高地上に位置する。集落は8世紀前半、9世紀中葉～後半、10世紀末～11世紀初頭にの3時期に断続的に営まれた（第29図）。

8世紀前半は掘立柱建物3棟・土坑・溝が確認できる。掘立柱建物は平面積70m²近くのSB3を中心とし、小型の掘立柱建物が2棟（SB1・2）が加わる構成となる。

9世紀中葉から後半は掘立柱建物2棟・井戸2基が確認できる。掘立柱建物は1×2間と2×3間のものであり、2棟とも平面積30m²前後の小型の建物である。2基の井戸のうち1基（SE11）は、方形の井戸側を持つものであり、小規模な2基の掘立柱建物にのみ付属するものとは考えにくい。

10世紀末から11世紀初頭は、掘立柱建物6棟・井戸3基・柵・溝・土坑が確認できる。建物・溝には重複するものがあり、方向・柱穴埋土の差により、前後2時期に細分できる。前半（10世紀末）はSB6A・7・8・10により建物小群が構成される。SB8は平面積200m²弱の大型の掘立柱建物であり、四面に庇が付き一部に束柱を持つ。SB7は2×2間の総柱建物であり、倉庫と考えられる。SB6Aも総柱建物であり建物が調査区外にのびるため不確定な要素を残すが、倉庫である可能性が高い。また、建物群の南側には井戸が存在し、北側にはSA19・SD21Aがあり、建物小群を区画する。

後半（11世紀初頭）はSB6B・9により構成される。SB9は2×5間で、中央に馬通りをもつ。SB8と比較すると小型だが、それでも平面積は70m²弱である。SB6BはSB6A同様倉庫である可能性が高い。前半同様、建物群の南側には井戸が存在し、北側には建物小群を区画すると思われるSD21Bがある。

四ツ屋遺跡〔四ツ屋遺跡調査団1988・上越市教育委員会1989〕

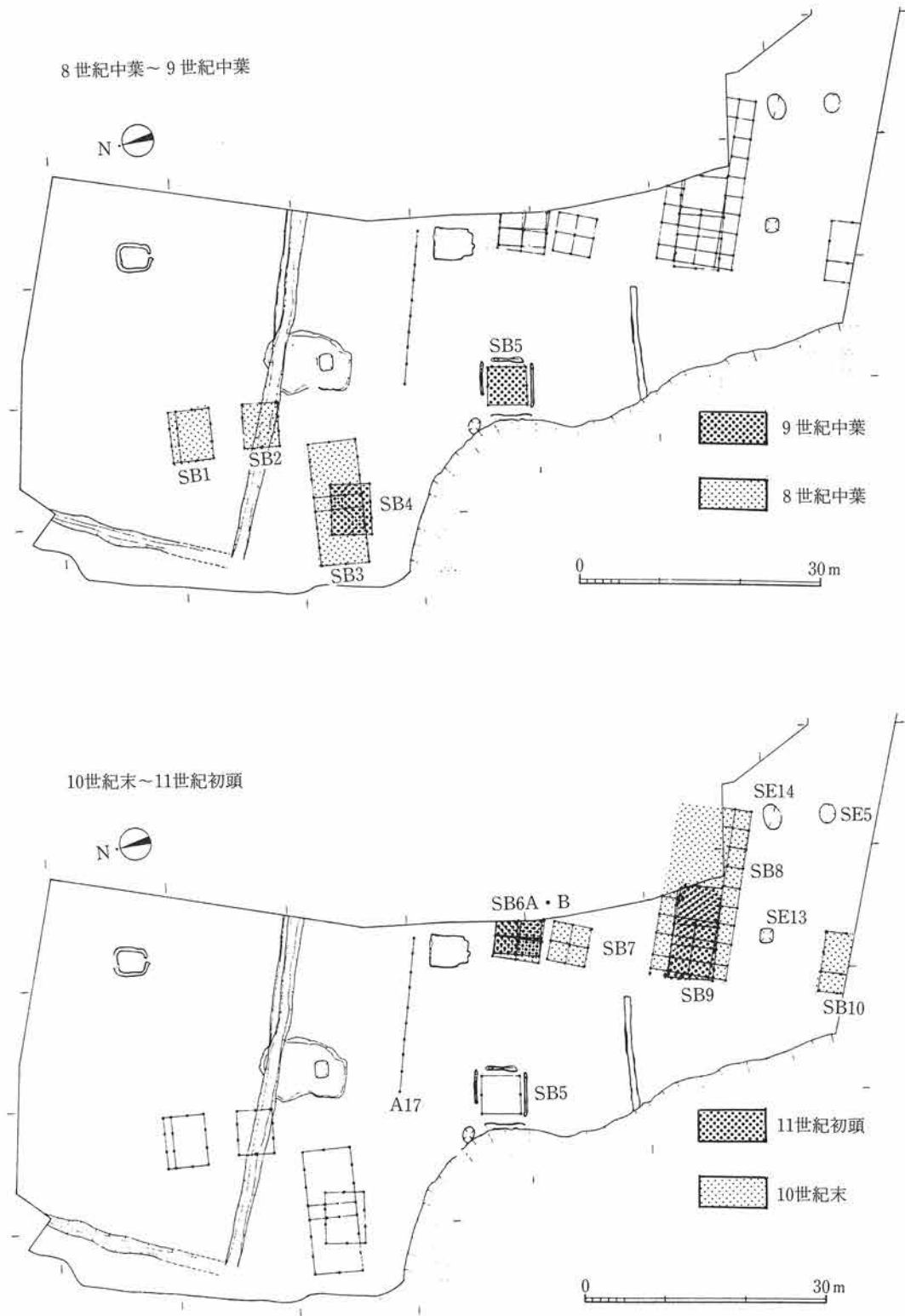
頸城平野の西部、沖積平野の微高地上に位置し、一之口遺跡の南方約1kmの上越市大字大豆字四ツ屋に所在する。1987・1988年の2次にわたって発掘調査が行われた。調査では掘立柱建物6棟のほか、多数の土坑・井戸・ピットなどが検出された。遺跡の存続期間は9世紀後半ないしは末から11世紀前半であるが、1987年度調査地区と1988年度の調査地区では主体となる時期が異なり、前者が9世紀後半から11世紀初頭、後者は11世紀前半を前後する時期である。

1987年度の調査地区では掘立柱建物が2棟検出された（第30図）。3×5間（SB3）と3×7間（SB2）の2棟とも大型のものであり、平面積は91.6m²と129.6m²である。2棟の掘立柱建物は一部が重複しており、同時存在したわけではない。前後関係は遺構の切り合いからは分からないが、SB2の柱穴からは大原2号窯式に比定できる灰釉陶器が出土しており、おそらくSB3が9世紀後半から10世紀初頭ないしは前半、SB2が10世紀前半から11世紀初頭の間機能したものと推測する。井戸は掘立柱建物に隣接して木製の方形井戸側をもつものが4基検出された。

11世紀前半には1987年度の調査区では明確な遺構は確認できなくなり、集落の中心は1988年度の調査区に移る。1988年度の調査区では掘立柱建物4棟のほか井戸・土坑・ピットなどが検出された（第31図）。4棟の掘立柱建物にはそれぞれ井戸・土坑が伴い、分布にもまとまりが見られないことから、それぞれ単独で建物小群を構成するものと推測する。

江向遺跡〔小島幸雄他1993〕

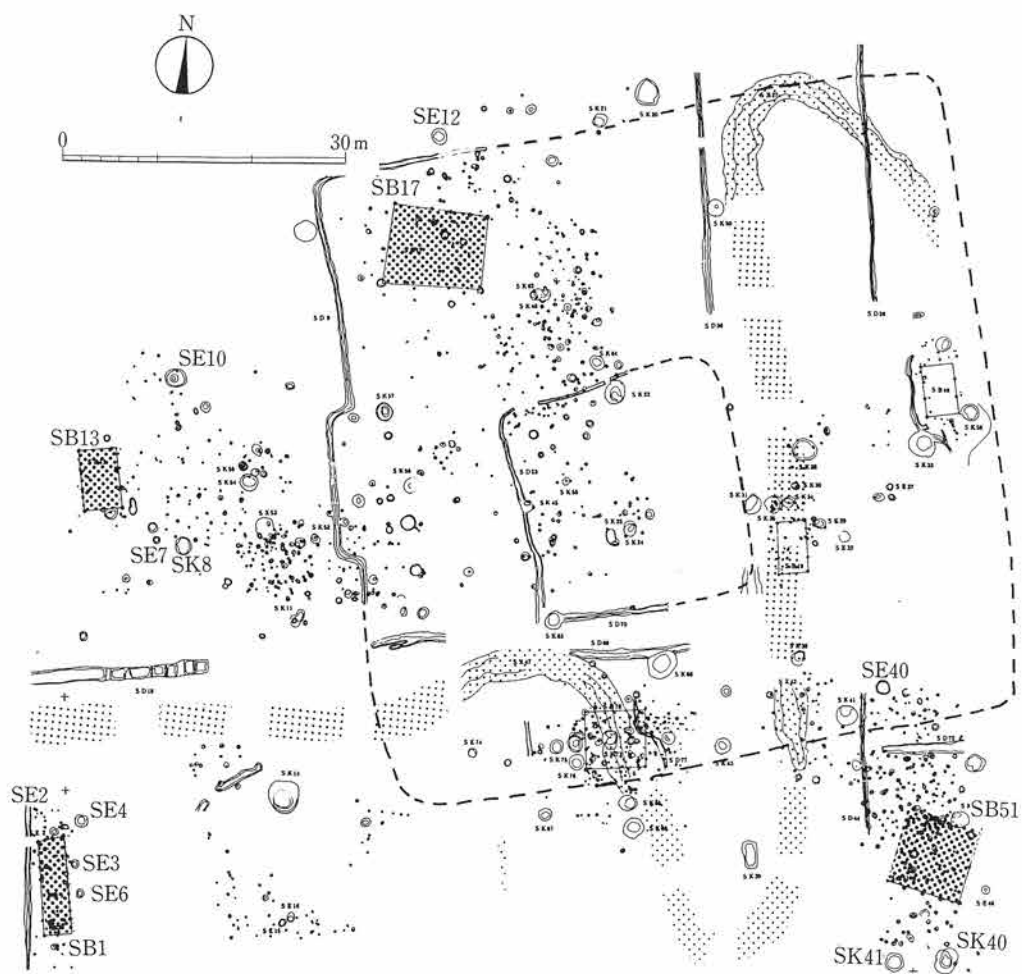
頸城平野の西部、一之口遺跡の北側約1km、上越市大字藤巻字江向に位置する。正式報告が無く、詳細は不明だが、掘立柱建物・井戸・土坑等が検出された。出土遺物には8世紀後半から10世紀後半のものが



第29図 下新町遺跡における集落の変遷（県教委1984を改変）



第30図 四ッ屋遺跡遺構配置図(1) (調査団1988を転載)

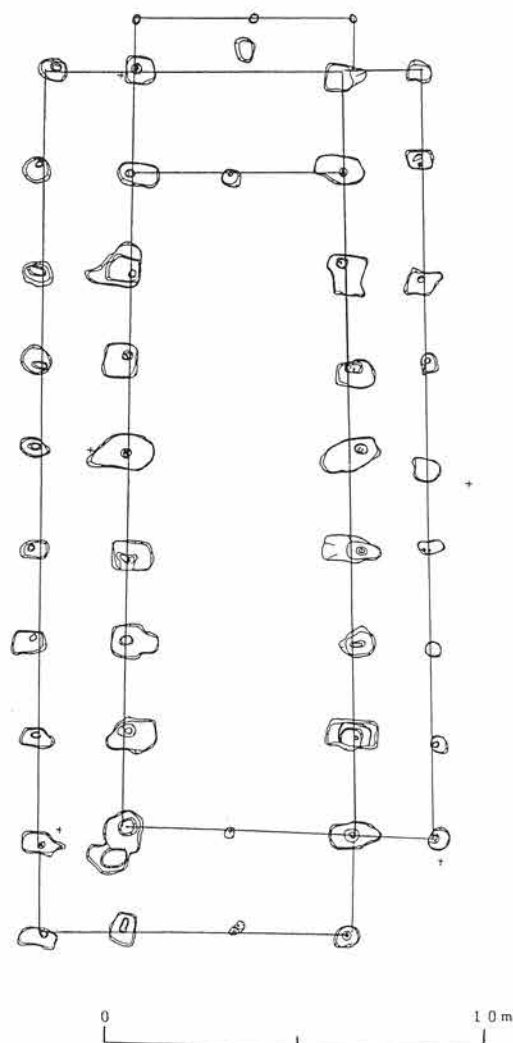


第31図 四ッ屋遺跡遺構配置図(2) (上越市教委1989を改変)

あるが、9世紀後半から10世紀後半の遺物が大半を占める。図示した掘立柱建物(SB100)も当期のものと推測できる(第32図)。SB100は身舎が2×8間で「南面と東面に庇をもち、北面と西面にも庇に類似した施設を持つ」〔小島他1993〕。掘立柱建物の平面積は、北面と西面の施設を含めた場合約230m²、含めない場合でも約220m²となる。

寺前遺跡A—II区〔坂井秀弥1990c、新潟県教育委員会1990〕

新潟県のほぼ中央部、柏崎平野と蒲原平野をつなぐ西山丘陵の裾部に位置し、三島郡出雲崎町大字上中条に所在する。正式報告がなく詳細は不明だが、中世の遺物は12世紀前半から15世紀を中心とする。調査では掘立柱建物12棟、井戸4基、溝、土坑、ピットなどが確認された(第33図)。検出された掘立柱建物は、SB310を除いてほぼ同一方向であり、重複が著しい。いずれも同一の建物小群に属するものであり、三方を溝によって区画する。最大の掘立柱建物はSB305であり、平面積約120m²、またSB301も平面積100m²を越える大型の掘立柱建物である。

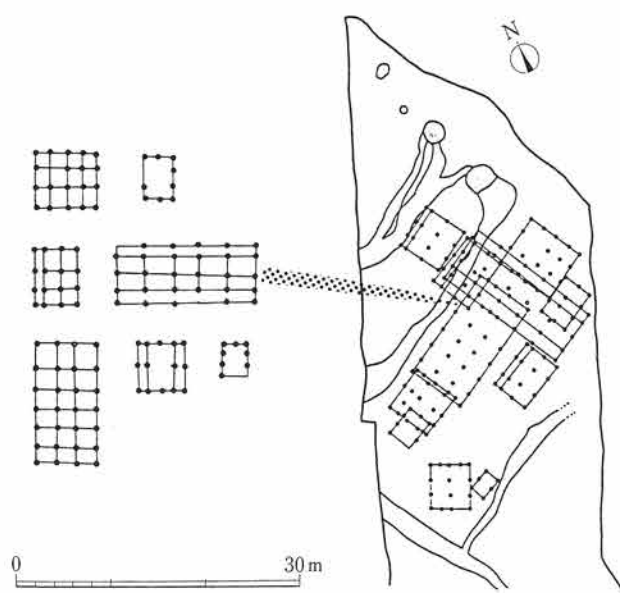


第32図 江向遺跡SB100(小島他1993を転載)

番場遺跡〔新潟県教育委員会1986〕

新潟県のほぼ中央部、島崎川右岸の丘陵裾に位置し、三島郡出雲崎町大字小木字番場に所存する。調査では掘立柱建物13棟、井戸12基、土坑、柵列、溝などが検出された(第34図)。遺跡の存続期間は12世紀後半から15世紀と長期間にわたる。

掘立柱建物は調査区の南西側に集中し、緩斜面を二段に削平しそれぞれに建物を配する。最大の掘立柱建物はSB17であり、平面積は約95m²である。調査区の西側にはこのほかにも平面積50m²をこえる掘立柱建物が複数重複し、大型の掘立柱建物が集中する。また

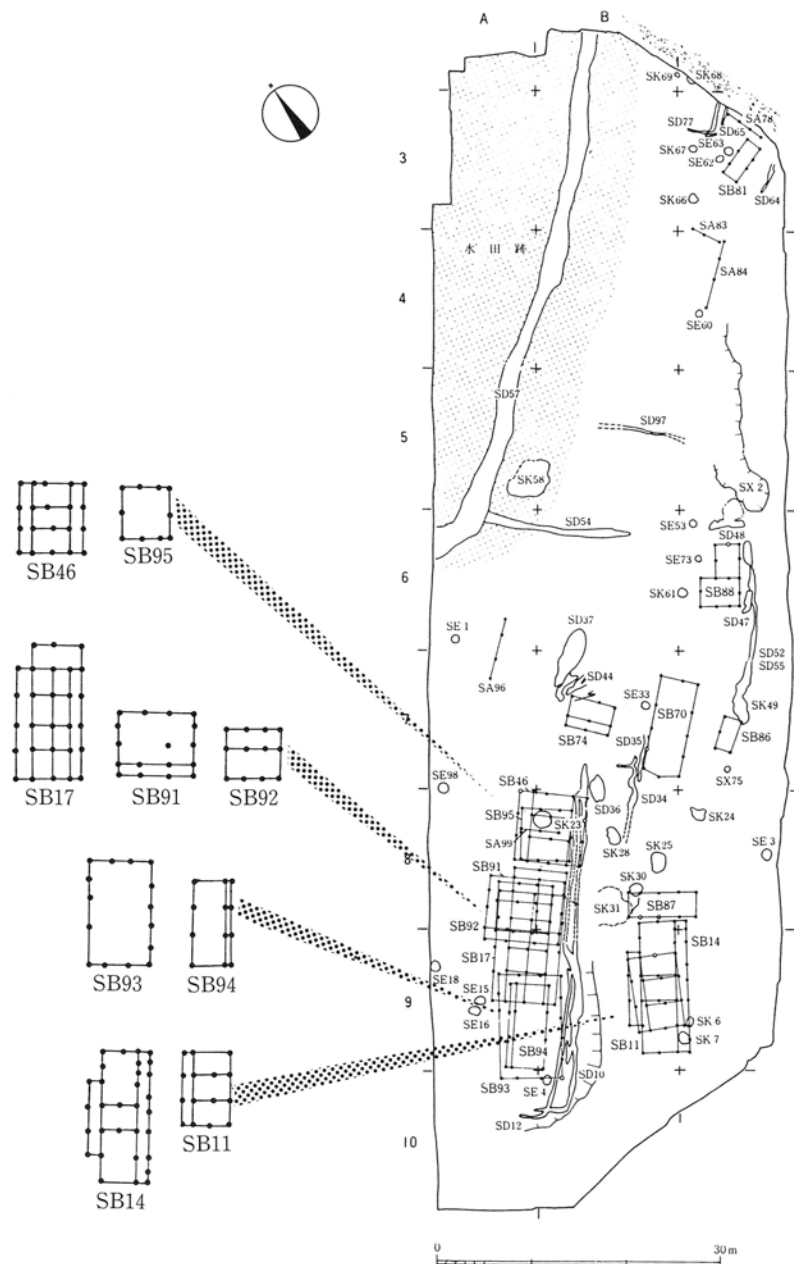


第33図 寺前遺跡A—2地区(県教委1990を改変)

これらの建物群の周辺には土坑・井戸がみられる。調査区の北側には水田跡が確認されたが、これは中世の溝SD57によって切られており、平安時代に遡る可能性がある。畝状遺構は検出されなかった。

樋田遺跡〔吉川町教育委員会1990・1991・1992〕

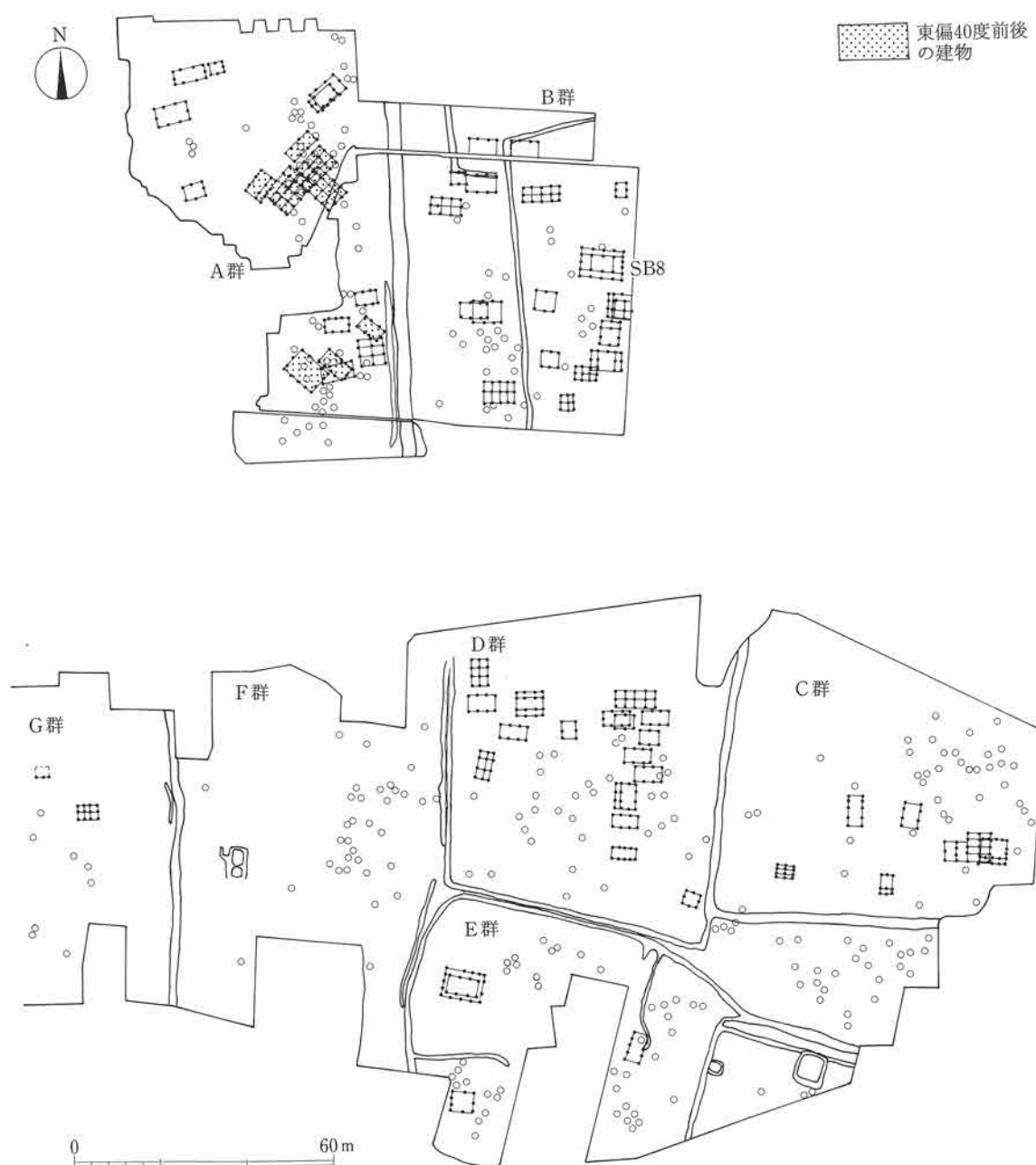
新潟県の南西部に展開する頸城平野の北東部、沖積平野の微高地上に位置し、中頸城郡吉川町大字西野島字樋田・北沢・八幡前・下堤に所在する。調査では掘立柱建物69棟のほか多数の井戸・土坑・ピットが検出された。遺跡の存続期間は13世紀初頭から15世紀である。集落の変遷については明確でないが、掘立柱建物の主軸の方向には、東偏40～50度前後のものと、おおむね方位に一致するものの2種があり、前者から後者への変遷が推測できる(第35図)。ただし東偏40～50度前後の建物は、調査区の北西側にわずかに



第34図 番場遺跡全体図（県教委1986を改変）

確認できるのみであり。存続期間は短かったものとする。

方位にはほぼ一致する掘立柱建物の分布は7群に分けられ、その周囲には溝が方形に巡る。溝の規模は幅1～3m、深さ50cm前後のものであり、防御的な機能を持つものではない。各建物群の掘立柱建物周辺には井戸・土坑が確認できるが、畝状遺構は確認できない。井戸の大半は円形もしくは楕円形の平面形を呈した素掘りのものが大半を占め、木製の井戸側を持つものはB群・D群に各1基確認できるのみである。最大の掘立柱建物はB群に存在する2次調査SB8であり、平面積は約70m²である。掘立柱建物にはあまり重複が見られないが、これが13～15世紀にわたって同時存在したわけではない。掘立柱建物の数が少ないC・E～G群には掘立柱建物が存在しない時期があった可能性もある。これに対してB群では18棟、D群には16棟と他の建物群に比べ多くの掘立柱建物があり、建物の規模も大きいものが多い。おそらく当集落における中核的な建物群として各時期を通じて存在したものと思われる。



第35図 樋田遺跡遺構配置図（吉川町教委1992を改変）

今池遺跡（新潟県教育委員会1984）

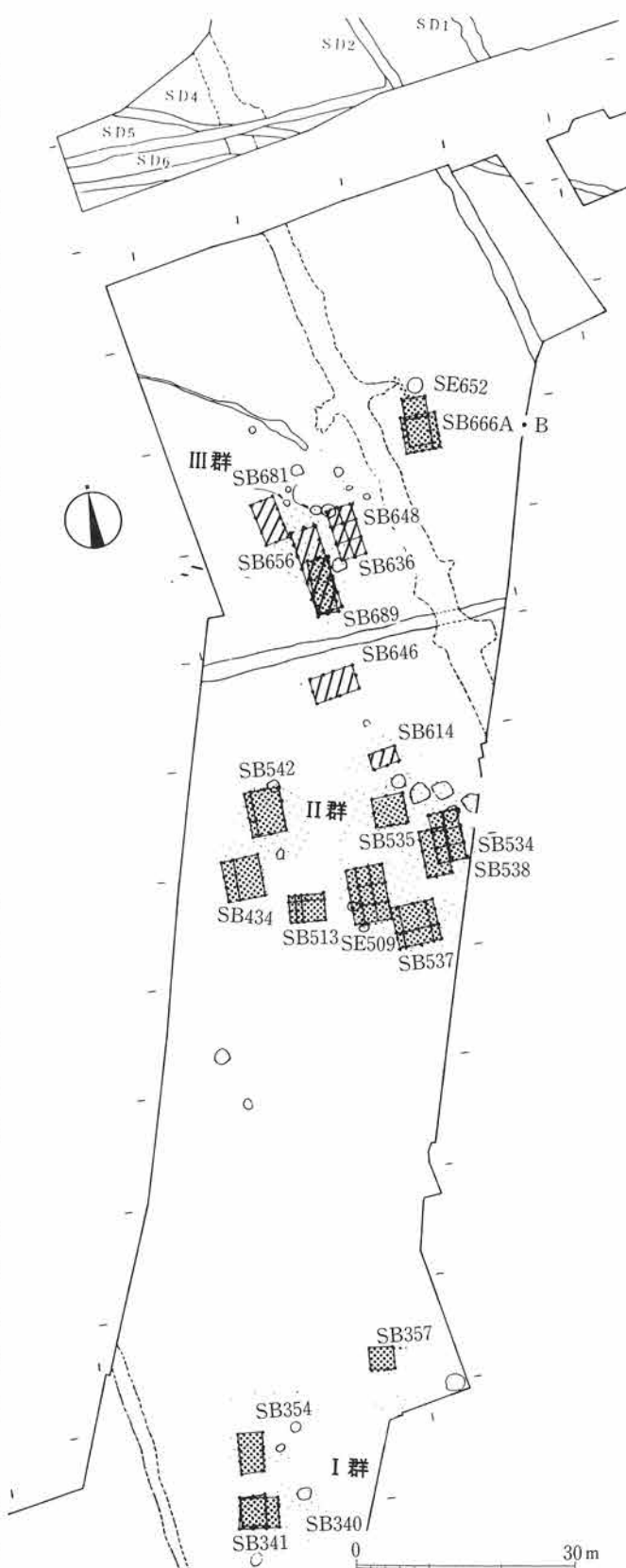
中世の遺構はB地区北半分に集中する。掘立柱建物20棟、井戸14基、土坑8基が検出された。掘立柱建物の分布は3群に分けられ、II群とIII群の間、III群の北側には建物小群を区画すると思われる溝が確認できる（第36図）。

I群は1～3×3間、平面積10～20m²前後の小型の掘立柱建物4棟によって構成される。II群は掘立柱建物10棟構成される。平面積10～20m²前後の小型の掘立柱建物のほかに、3×3間ないし3×4間、平面積30～40m²前後の中型の掘立柱建物が5棟確認できる。III群は6棟の掘立柱建物によって構成される。B群同様平面積30～40m²前後の中型の掘立柱建物と10～20棟前後の小型の掘立柱建物により構成される。三つの建物小群にはそれぞれ土坑と井戸が確認できる。井戸はすべて素掘りのものであり、井戸枠をもつものは確認出来ない。

子安遺跡（新潟県教育委員会1984）

新潟県の南西部に広がる頸城平野の中央部、上越市大字子安に所在する。沖積平野の微高地上に位置し、今池・下新町遺跡とは隣接する。調査では掘立柱建物が11棟が検出されたが、このうち2棟（SB10・67）は平安時代の掘立柱建物である。調査区の西側に検出された畝状遺構も平安時代の可能性が高い（第37図）。中世の遺物は12～13世紀のものと16世紀のものが存在するが、掘立柱建物が存在した時期は12～13世紀と考える。SB65・66とSB9・72の間および、調査区の西側には溝（SD1・4）が存在するが、これは近世のものである。

中世の掘立柱建物9棟には主軸の方向がほぼ南北方向を向くもの（SB41・60）、やや東に振るもの（SB49・69）、西偏7度前後のもの



第36図 今池遺跡（中世）遺構配置図（県教委1984を改変）

(SB5・9・60・65・72)がある。それぞれ時期が異なるものと考えるが、変遷については明確でない。最大の掘立柱建物はSB65であり5×6間、平面積は約90m²を計る。井戸はSB49の周辺と調査区北側に分布が分かれる。いずれも素掘りの井戸であり、井戸枠を持つものは確認できない。

3 集落遺跡の分布

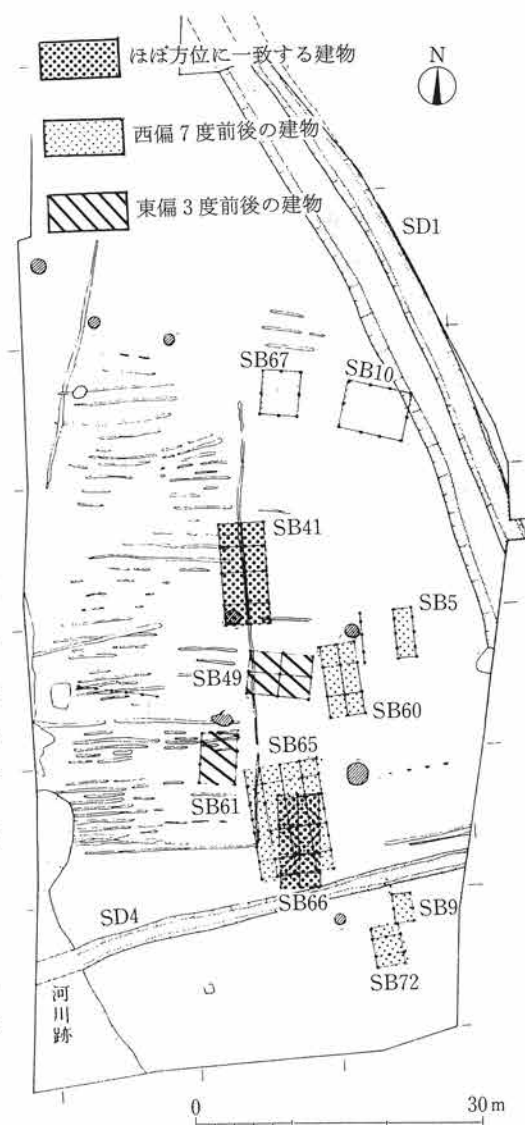
以上のように越後の古代集落は年代・階層により多様な形態をみせるが、これらの集落は以下のように分類できるものとする。

A類：堅穴住居を主体とする集落であり、掘立柱建物は存在してもそれほど多くない。3～5棟前後の堅穴住居・掘立柱建物からなる建物小群が複数集まり構成される集落であり、建物小群間の空閑地は狭く集村的な景観を持つ。倉庫は存在する場合もあるが、特定の建物小群への帰属は認めにくく、集落内の共同のものであった可能性が高い。また井戸は存在しない。集落の立地は丘陵上・砂丘上など周辺に水田適地を認めにくい場合がある〔坂井1989〕。一之口遺跡(6世紀末～7世紀中葉)・山畑遺跡・須沢角地遺跡・山三賀Ⅱ遺跡がこれに当たるが、6世紀末から7世紀初頭にかけて成立し平面積80m²以上の大型の堅穴住居が存在するAⅠ類(一之口遺跡・山畑遺跡)と7世紀末から8世紀前半にかけて成立し、平面積80m²を越える堅穴住居が存在しないAⅡ類(須沢角地遺跡・山三賀Ⅱ遺跡)に細分する。AⅡ類は集落の存続期間が150～200年前後と長期にわたるものが多い。7～9世紀の一般集落と考える¹¹⁾。

B類：官衙関連と考える遺跡を一括した。今池遺跡(前半期)・栗原遺跡・八幡林遺跡(A・B・C地区)・曾根遺跡・緒立遺跡・的場遺跡がこれにあたる。BⅠ～BⅢ類の3種に細分した。

BⅠ類は掘立柱建物を中心とする集落で、堅穴住居は存在してもそれほど多くない。掘立柱建物2～3×3～4間で平面積30m²前後のものが多いが、100m²以上のものも一定量存在する。掘立柱建物の柱掘方はほとんどのものが方形である。後述するC・E類と比較すると建物小群同士の間隔は狭く、掘立柱建物が比較的密集する。大型の掘立柱建物を中心とした建物小群には倉庫を伴う場合がある。国府・群衙の官人の居宅を想定したい。7世紀末に出現し9世紀末ないしは10世紀初頭までみられる。

BⅡ類は掘立柱建物を中心とし、建物小群間の空閑地が狭い点はBⅠ類と同じだが平面積60m²を越えるような大型の掘立柱建物が確認できない。曾根遺跡がこれにあたる。また、9世紀中葉から後半の下新町もこの類型となる可能性がある。存続期間はBⅠ類に準ずる。官衙に付属する工房などなんらかの施設を想定したい。



第37図 子安遺跡全体図(県教委1984を改変)

BⅢ類は、大型の倉庫が一定量存在する遺跡である。緒立遺跡では倉庫以外の掘立柱建物は確認できない。また、的場遺跡では倉庫以外の掘立柱建物はいずれも小型である。8世紀初頭には成立するが下限は明確でない。

C類：掘立柱建物を中心とする集落であり、平面積80～100m²前後の大型の掘立柱建物を中心とし、これに平面積40～50m²前後の中型の掘立柱建物、竪穴住居が附属する。B類同様、掘立柱建物の柱掘方は方形のものが多く、建物小群同士の間隔は広いが、これが畑地として利用された可能性は低い。また倉庫・井戸は基本的に持たない。遺跡の立地は台地上が多い。岩野下遺跡・古町B遺跡がこれにあたる。類例としてあげた2例から考えると8世紀前半前後に出現し、9世紀前半を前後する時期には廃絶する。官衙とは直接関連しない有力者の居宅と考える。

なお、岩野下遺跡・古町B遺跡とも古代頸城郡に属する遺跡であるが、沼川郷(岩野下遺跡)、佐味郷(古町B遺跡)という頸城郡の外縁に位置する点は注目しておきたい。

D類：1～3棟程度の掘立柱建物ないしは竪穴住居によって構成される建物小群(掘立柱建物が主で竪穴住居は少ない)が散在する集落。建物小群には土坑を伴う場合があるが、井戸・倉庫は基本的に持たない。建物小群同士の間隔は広く、これは畑地として利用された場合がある。集落の立地は沖積平野の自然堤防・微高地上、扇状地などが多く、集落に隣接して水田が存在した可能性が高い。金屋遺跡・後半期の今池遺跡・8世紀後半から9世紀後半の一之口遺跡・岩田遺跡などがこれにあたる。建物小群間および建物小群内部の階層差は後述するE類と比較すると明確でない。8世紀後半に出現し、11世紀まで確認できるが、個々の集落の存続期間は短く100年を越えることはあまりない。8世紀後半以降の一般集落の一つのタイプと考える。

E類：1～3棟程度の掘立柱建物によって構成される建物小群が散在する集落。個々の建物小群には土坑・井戸・畑地が伴う。建物小群内部および建物小群間には明確な階層差が存在する場合が多く、大規模な掘立柱建物の存在する建物小群には倉庫が附属する場合がある。D類とは井戸の有無により区別する。集落の立地は沖積平野の自然堤防上や微高地に立地する場合が多く、D類同様集落周辺に水田が存在した可能性が高い。9世紀前半に出現し9世紀末以降増加する。個々の集落の存続期間は短く、100年を越えることはあまりない。10世紀前半から後半の一之口遺跡、小丸山遺跡を典型とし、四ツ屋遺跡・江向遺跡・10世紀末～11世紀の下新町遺跡のような一棟単独で存在するものもこれに含める。9世紀前半以降の一般集落の一つと考える。

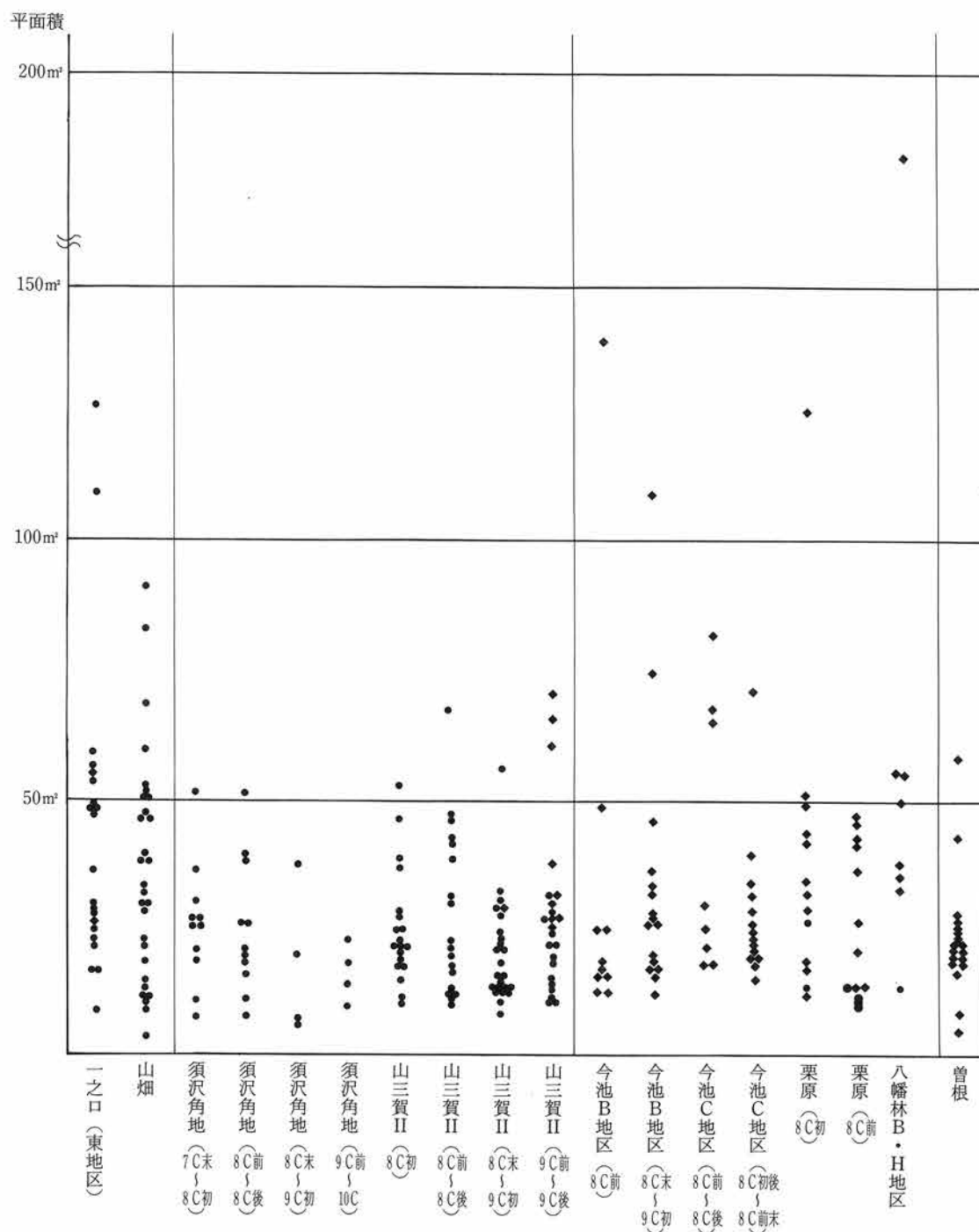
F類：1～3棟程度の掘立柱建物によって構成される建物小群が散在する集落。個々の建物小群には土坑・井戸が伴い、建物小群の四周を溝で方形に区画する場合もある。建物小群内部および建物小群間には明確な階層差が存在する。このうち大規模な掘立柱建物は総柱で、複数重複して検出される場合が多い。また個々の集落の存続期間は長く、100年以上存続する例が多い。E類とは明確な区別はむずかしいが、総柱建物の量比、存続期間の長さにより区別する。集落の立地は沖積平野の自然堤防上や微高地に立地する場合が多く、D・E類同様集落周辺に水田が存在した可能性が高い。100m²前後の掘立柱建物が存在するFⅠ類(寺前遺跡・番場遺跡・中世の子安遺跡)と、それ以下の掘立柱建物のみで構成されるFⅡ類(中世の今池遺跡・樋田遺跡)がある。12世紀後半以降の一般集落の1つのタイプと考える。

4 古代集落の変化と画期

このように考えた場合6世紀から13世紀の越後の集落に7世紀初頭・7世紀末から8世紀初頭・8世紀

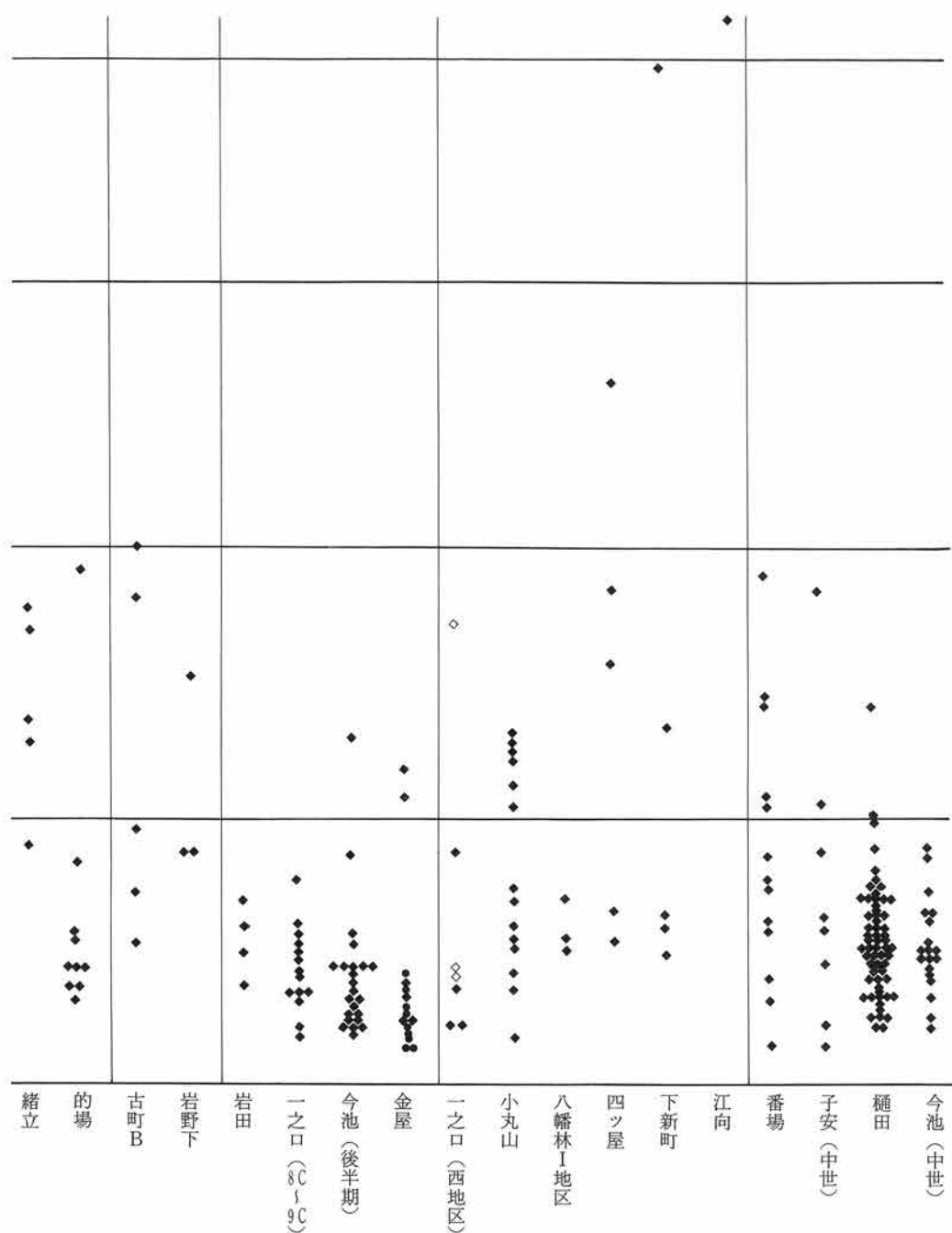
後半・9世紀前半・9世紀末から10世紀初頭・12世紀前半の6つの画期が存在する。

7世紀初頭はAⅠ類の集落が出現する時期である。越後における古墳時代後期の集落の様相は明らかではないが、2～4棟前後の竪穴住居・掘立柱建物からなる建物小群が複数集まり構成されるAⅠ類は、古墳時代後期と比較し集村的な景観を持つ大規模な集落であり、その成立には在地の集落の大規模な改変をともなったものと推測する。AⅠ類は坂井秀弥氏のいう「律令型村落」の原型ともいえるものであり、金属器（仏器）志向の土器の出現とともに、古墳が一定量存在する7世紀を古墳時代とせずに古代とすることの理由の一つはここにあり、重要な変化の一つとして評価したい。



7世紀末から8世紀初頭は、官衙関連遺跡と推測するB類が成立する。またC類も当期に成立した可能性が高い。一般集落においても変化が見られ、AⅠ類は確認できなくなり、新たにAⅡ類が出現する。一般集落から平面積80m²をこえる大型の竪穴住居が確認できなくなることと、官衙関連遺跡と推測するB類の成立は一連のものと考えられ、当期には官衙関連遺跡の成立にともないそれまで一般集落のなかに存在した有力者の多くが、律令官人として官衙周辺に移動した可能性が高い。また方形の柱掘方を持つ大型の掘立柱建物が確認できるようになるのも当期以降であり、有力者の住まいにも変化が確認できる。

8世紀後半にはD類が出現する。9世紀前半以降明確となる集落の散村化の傾向は8世紀後半にその端



第38図 主要遺跡における建物の平面積

9世紀前半にはE類が出現する。またこれと同時に須沢角地遺跡や岩野下遺跡・古町B遺跡のように規模を縮小するものや廃絶するもの、今池遺跡のように遺跡そのものは存続するが官衙関連遺跡から一般集落へと性格に変化が見られるもの、山三賀II遺跡のように建物小群に附属する倉庫が存在しない状況から特定の建物小群に倉庫が附属するような状況へ集落の構造が変化するものなど、A・B・C類の多くが変質・縮小・廃絶する。集村的なA類が人口増加を生じやすく個々の人間を把握しやすい一方で、未墾地の開発と開発後の維持には困難を伴う場合が多いが、E類はその逆で点在する未墾地の開発とその後の維持には適したものといえる。当期は7世紀以来の一連の動向が転換する大きな画期として評価できるものと考えられる。

	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀	11世紀	12世紀	13世紀
一之口	A類	D類	E類	F類				
山畑	A類							
須沢角地	A類							
山三賀II	A類							
今池	B類	D類					F類	
栗原	A類							
曾根	A類							
八幡林	A類			E類?				
古町B	C類	D類?					F類?	
岩野下	C類		D類					
岩田		D類						
金屋			D類					
小丸山			E類					
下新町	A類		D類?	E類				
四ッ屋			E類			地区移動	E類	
寺前							F類	
番場				E類?			F類	
樋田							F類	
子安			D類				F類	

— 100 —

世紀後半にあらわれた動向の確立していく時期と考える。当期の一般集落と考えるE類には、平面積60m²以上の大型の掘立柱建物が存在する場合が多い。この背景には農民の階層分化という側面は無視できないが、官衙関連遺跡と考えるB類の消滅と合わせて考えるならば、律令期には官人として官衙周辺に居住していた有力者の一部が、当期には中核的な存在として新たに集落を再編していった結果とも考えうる。⁽²⁾

11世紀代の集落の様相は明らかではないが、12世紀前半にはF類が出現した。F類の集落景観はE類と共通する部分が多いが、建物小群を溝で区画する例があり、大型の掘立柱建物には総柱構造のものが一定量存在するなど異なる点がいくつかある。またE類と比較し遺跡の存続期間が長いものが多い。長期間存続する集落遺跡は古代前期にも存在するが、その背景には差があったものと考えており、これについては次説で述べたい。

結 び

以下では建物小群の動向を中心に古代集落と中世集落の差異について私見を述べ結びとしたい。

越後における古代前期の集落には、岩野下遺跡や古町B遺跡のようにそれ程規模の大きくない遺跡も存在するが、山畑遺跡や山三賀II遺跡・今池遺跡のような大規模で長期間存続する遺跡が多い。ただし遺跡を構成する個々の建物小群をみた場合、それぞれが長期間安定して存続するわけではない。山三賀II遺跡や須沢角地遺跡における建物小群を構成する竪穴住居や掘立柱建物の数は時期によりかなり変動がみられ、大型の竪穴住居・掘立柱建物も同一の建物小群内に累世的に構築されるわけではない。今池遺跡（前半期）のB建物群では掘立柱建物の主軸方向が東偏4度前後のものから東偏8度前後のものに変化するが、この間には約50年前後の空白期間が存在した可能性が高い。またC建物群は8世紀初頭から9世紀初頭にかけて継続的に建物群が存続するが、8世紀後半には掘立柱建物の配置に大幅な変更が行われた。

吉田孝氏は日本の古代社会を双系的な性格を強く残した社会であるとする立場から一般の階層の建物小群を「夫婦と子供からなる小家族が複数集まった」もので、特定の個人や婚姻を媒体として双系的に結びつけた集団的な規律を欠いたゆるやかな集合体であり、「財産所有の主体にもなっていなかった」とした。また「財産や地位が庶民から卓越し、その相続や継承が問題となる階層においては、特定祖先との系譜関係を軸とした集団が形成されているが」、このような集団においても、首長位は傍系親を含む比較的広い範囲で移動し、首長の「政治的・社会的地位の変動によって絶えず再編成されていた」ことを指摘している〔吉田1983〕。山三賀II遺跡・須沢角地や今池遺跡でみた建物群・建物小群の動向はこのような解釈とよく一致するものである。

これに対し12世紀前半以降は寺前遺跡A—2地区・番場遺跡にみるように、大型の掘立柱建物が複数重複してみられるようになる。このような近接した位置での数回におよぶ建物の建て替えは、建物小群が安定して存続したことを示すものとする。中世前期の建物小群のなかには樋田遺跡A・C・E・F群や今池遺跡A群のように安定して存続したとは考えにくい建物小群も存在するが、大型の掘立柱建物をふくむ集落内の中核的な建物小群は長期間安定して存続するものが多い点は重要である。

11世紀後半から12世紀前半にかけて中央貴族の中には「氏」が分立し、直系の男子を軸に家督が相続される「家」が確立していくが〔吉田1983・石井1993等〕、上述した建物小群の動向は、12世紀以降越後の一般集落においても直系の男子を軸に家督が相続される「家」が確立していったことを示すものとする。そしてこのような「家」の確立が中世村落の長期存続を支えたものと推測する。

もちろんこのような「家」の確立は、11世紀以降急速に進展したものではない。これには9世紀前半か

ら10世紀にかけての一連の変化が重要であったものとする。9世紀前半以降の建物小群には固有の井戸と畑地を持つものが確認できるようになり、10世紀にはこれがかなり一般化する。当期における集落の存続期間の短さからもわかるように、不安定な建物小群の様相は10・11世紀も基本的には変わらなかったものと考えられるが、建物小群は「消費・生産においてある程度自立した存在」〔坂井1989〕となり、前代と比較すると建物小群内の紐帯も強まり、「家」の成立に重要な契機となったことは容易に推測できる。

また、本稿では触れることができなかったが、9世紀末から10世紀にかけて、多数の土師器無代椀と少数の高級品（施釉陶磁器・漆器）からなる食器様式が村落内の中核的な建物小群を中心に成立するが〔坂井1990・春日1993〕、このような食器様式は家長の地位の上昇と直系の男子を軸とする家督の相続の確立と強い関連を持ちながら展開したものとする。

以上越後における古代集落遺跡の推移についてみてきたが、このような動向は他地域と多くの点で共通するものとするが、異なる点の幾つが存在するであろう。本稿では他地域との比較についてはまったく触れることができなかった。今後の課題としたい。

本稿が成るにあたっては川畑 誠氏、北野博司氏、木立雅朗氏、坂井秀弥氏、笹沢正史氏、高橋 勉氏、滝沢規朗氏、田中 靖氏、出越茂和氏、原 芳明氏ほか多くの方々から御教示をいただいた。文末ながら記して感謝いたします。

註

- 1) ここでいう越後とは現在の新潟県のうち佐渡を除いた地域のことを指す。そのため古代における行政的な地域区分である越後とは時代によって一致しない場合がある。
- 2) 新潟県以外の北陸地方では、湯尻修平氏〔湯尻1983〕・岸本雅敏氏〔岸本1986〕・田嶋明人氏〔田嶋1983〕・森秀典氏〔森1988〕・駒見和夫氏〔駒見1986〕・宇野隆夫氏〔宇野1991〕等の研究がある。また近畿地方では小笠原好彦氏〔小笠原1979〕・広瀬和雄氏〔広瀬1986・1989〕の一連の研究がある。
湯尻氏・岸本氏の研究は掘立柱建物の平面積を分析対象としたもので、集落内の最大の掘立柱建物の規模に注目し集落遺跡の分類を行っている。本稿の第39図のグラフは両氏と同様な方法によるものである。
広瀬和雄氏の論考〔広瀬1989〕は7世紀初頭の画期の評価の内容等について本稿と異なる点は存在するが、古代後半から中世前期にかけての集落の変化や様相や集落分析の方法については多くの点で参考となった。
また、宇野隆夫氏・田嶋明人氏の論稿は、本稿とは分析方法は異なる部分が存在するが、画期の設定とその評価については学ぶべき点が多かった。
- 3) 9世紀前半から11世紀の年代については、ここで示した年代よりも25～50年さかのぼる可能性がある。
- 4) 6～7世紀の掘立柱建物と8～9世紀の掘立柱建物については識別が難しい。報告〔新潟県教育委員会他1994〕ではSB676⁽⁵⁾・1380⁽⁵⁾・5006⁽⁵⁾・654⁽⁵⁾・5010⁽⁵⁾・634⁽⁴⁾については6～7世紀の可能性があるとするが、年代の特定は避けている。またSB5001⁽⁵⁾・5002⁽⁵⁾・5004⁽⁵⁾・5006⁽⁵⁾は8～9世紀の可能性が高いとする。本稿で柱穴が円形で小型のものについては報告とは異なり6～7世紀の掘立柱建物と考えた。また本文中でも述べたように、平面系が矩形で大型の柱掘方を持ち束柱を持たない掘立柱建物は6～7世紀の倉庫と考えた。
- 5) 調査で検出された掘立柱建物はいずれも中世ないしはそれ以降のものである。
- 6) 報告〔新潟県教育委員会1984〕では東偏8度前後のものと4度前後のものが混在して併存したとする。
- 7) 主用建物群(A～C建物群)と分布が重複する9世紀前半以降の掘立柱建物については、柱穴の規模や埋土から判断した。
- 8) 方形井戸側を持つ井戸が8世紀代であることは田中靖氏より御教示を受けた。
- 9) SB17・36の理解については報告書と異なる部分がある。
- 10) SB141・169は10世紀代の溝を切って建てられており、10世紀以降のものとする。
- 11) 本稿では触れなかったが十日町市馬場上遺跡もA類の可能性が高い。
- 12) 脱稿後南蒲原郡田上町道下遺跡の発掘調査報告書が刊行された〔田上町教育委員会1994〕。また三島郡和島村門新遺跡の発掘調査が行われた〔新潟県和島村教育委員会1994b〕。両遺跡とも10世紀代の平面積200m²前後の大型の掘立柱建物が検出されている。

参考文献

- 明石一紀 1984「古代・中世の家族と親族」『歴史評論』416号 のち同1990『日本古代の親族構造』吉川弘文館収録
- 浅香年木 1978「第二編 第三章 古代における手取扇状地の開発」『古代地域史の研究』法政大学出版局
- 新井市教育委員会 1984『栗原遺跡第7次・第8次発掘調査報告書』
- 石井 進 1993「11～13世紀の日本」『岩波講座 日本歴史』岩波書店
- 宇野隆夫 1978「井戸考」『史林』第65巻5号 史学研究会 のち同1989『考古資料に見る古代と中世の歴史と社会』真陽社収録
- 宇野隆夫 1985「古代的食器の変化と特質」『日本史研究』208号 日本史研究会 のち同1989『考古資料に見る古代中世の歴史と社会』真陽社収録
- 宇野隆夫 1991『律令社会の考古学的研究—北陸を舞台として』桂書房
- 遠藤孝司 1987「第V章—1 掘立柱建物について」『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第46集 岩野下遺跡』新潟県教育委員会
- 大山喬平 1977「中世社会のイエと百姓」『日本史研究』176号 日本史研究会 のち同1978『日本中世農村史の研究』岩波書店収録
- 小笠原好彦 1979「畿内および周辺地域の掘立柱建物集落の展開」『考古学研究』第18巻2号考古学研究会
- 小笠原好彦 1989「古墳時代の堅穴住居集落に見る単位集団の移動」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22集 国立歴史民俗博物館
- 春日真実 1993「王朝国家期の越後—上越市一之口遺跡（西地区）・新潟市小丸山遺跡を事例として」『新潟考古』第4号 新潟県考古学会
- 春日真実 1994「第VI章—2 古墳時代後期の土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡（東地区）』新潟県教育委員会、新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 川村浩司 1989「越後の古代集落素描」『新潟考古学談話会会誌』第3号 新潟県考古学談話会
- 岸本雅敏 1986「新町II遺跡の古代掘立柱建物群の性格」『新町II遺跡の調査』婦中町教育委員会
- 鬼頭清明 1979『律令国家と農民』塙書房
- 鬼頭清明 1985『古代の村』古代日本を発掘する6 岩波書店
- 木村宗文 1984「文献からみた古代・中世の頸城」『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会
- 越路町教育委員会 1990『岩田遺跡』
- 小島幸雄・中西 聡・笹川修一 1993「上越市江向遺跡の調査」『新潟県考古学会第5回大会 研究発表会発表要旨』
- 坂井秀弥 1984「今池遺跡群における奈良・平安時代の土器」『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1985「頸城平野古代・中世開発史の一考察」『新潟史学』18 新潟史学会
- 坂井秀弥 1989a「第Ⅶ章 まとめ」『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第53集 山三賀II遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1989b「越後における古代手工業生産の様相」『北陸の古代手工業生産』北陸古代手工業生産史研究会
- 坂井秀弥 1990a「越後平安期土器編年素描」『東国土器研究』第3号 東国土器研究会
- 坂井秀弥 1990b「越後における古代末・中世の土器様相と画期」『シンポジウム 土器から見た中世社会の成立』シンポジウム実行委員会
- 坂井秀弥 1990c「出雲崎町寺前中世遺跡の調査」『新潟県考古学会第2回大会 研究発表会研究要旨』
- 坂井秀弥 1991「地籍図からみた越後・佐渡の条里と開発」『条里制研究』第7号 条里制研究会
- 坂井秀弥 1994「庁と館、集落と屋敷—東国古代遺跡にみる館の形成」佐藤 信・五味文彦編『城と館を掘る・読む—古代から中世へ』山川出版社
- 坂井秀弥・鶴間正昭・春日真実 1991「佐渡の須恵器」『新潟考古』2号 新潟県考古学会
- 坂本賞三 1970「王朝国家体制」『講座 日本史』2 東京大学出版会
- 上越市教育委員会 1978『岩木地区発掘調査報告書Ⅰ』
- 上越市教育委員会 1979『岩木地区発掘調査報告書Ⅱ』
- 上越市教育委員会 1989『四ツ屋遺跡発掘調査概報』
- 鈴木俊成 1994「第Ⅵ章—1 平安時代の土器、5 掘立柱建物について、6 古墳時代後期の堅穴住居について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第60集 一之口遺跡（東地区）』新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田上町教育委員会 1994『道下・白地遺跡』

- 田嶋明人 1983「奈良・平安時代の建物グループと集落遺跡」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌第26号 石川考古学研究会
- 田嶋明人 1986「漆町遺跡出土土器の編年の考察」『漆町遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』報告編
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 都出比呂志 1989「第三章一三 古墳時代集落と階層分解」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 新潟県教育委員会 1982『栗原遺跡第4次・5次発掘調査概報』
- 新潟県教育委員会 1983『栗原遺跡第6次発掘調査概報』
- 新潟県教育委員会 1984『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』
- 新潟県教育委員会 1985『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第37集 金屋遺跡』
- 新潟県教育委員会 1986『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第40集 一之口遺跡西地区』
- 新潟県教育委員会 1987a『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第46集 岩野下遺跡』
- 新潟県教育委員会 1987b『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第48集 三島郡出雲崎町番場遺跡』
- 新潟県教育委員会 1989『新潟県埋蔵文化財発掘調査報告書第53集 山三賀Ⅱ遺跡』
- 新潟県教育委員会 1990「寺前遺跡（A-2区）」『新潟県埋蔵文化財だより』5
- 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団 1994『新潟県埋蔵文化財調査報告書第 集一之口遺跡東地区』
- 新潟県黒埼町教育委員会 1993『緒立c遺跡発掘調査概報』
- 新潟市教育委員会 1987『新潟市小丸山遺跡発掘調査概報』
- 新潟市教育委員会 1989『1988年度埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 新潟市教育委員会 1991『1989年度埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 新潟市史編さん原史古代中世部会 1994『新潟市史 資料編1 原史古代中世』
- 新潟県青海町教育委員会 1988『須沢角地A遺跡発掘調査報告書』
- 新潟県豊浦町教育委員会 1981『曾根遺跡Ⅰ』
- 新潟県豊浦町教育委員会 1982『曾根遺跡Ⅱ』
- 新潟県和島村教育委員会 1992『八幡村遺跡』
- 新潟県和島村教育委員会 1993『八幡村遺跡』
- 新潟県和島村教育委員会 1994a『八幡村遺跡』
- 新潟県和島村教育委員会 1994b『門新遺跡現地説明会資料』
- 原口正三 1977「古代・中世の集落」『考古学研究』第23巻4号 考古学研究会
- 広瀬和雄 1986「中世への胎動」『岩波講座 日本考古学6 変化と画期』岩波書店
- 広瀬和雄 1989「畿内の古代集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第22条 国立歴史民俗博物館
- 藤塚 明 1993「的場遺跡の概要と予測—低湿帯遺跡の一例として」『市史にいがた』12 新潟市史編纂室
- 森 秀典 1988「古代の掘立柱建物について」『立山町文化財調査報告第6冊 浦田遺跡第二次発掘調査概報』立山町教育委員会
- 吉岡康暢 1983「奈良・平安時代の土器編年」『東大寺領横江庄遺跡』松任市教育委員会・石川考古学研究会
- 吉川町教育委員会 1989『樋田遺跡発掘調査概報』
- 吉川町教育委員会 1990『樋田遺跡第二次発掘調査概報』
- 吉川町教育委員会 1991『樋田遺跡第三次発掘調査概報』
- 吉川町教育委員会 1993『古町B遺跡発掘調査報告書』
- 吉田 晶 1980『古代村落史序説』塙書房
- 吉田 孝 1976「律令制と村落」『岩波講座 日本歴史』三巻、後改稿して同1983『律令国家と古代の社会』収録
- 四ッ屋遺跡発掘調査団 1988『四ッ屋遺跡発掘調査報告書』